

て個々といふことが随伴するところの、一時的の部分目的が、永久の價値を得るからである。

此の見地からすると、謂ふところの個體的統一なるものは、普遍的統一を指し示すものなることが知らるゝのであるといひ、又觀念の眞髓は、たゞ理性の合法的効力が之れを明かにすることが出来る、而して其の普遍的効力が證明さるゝ以上、随つて其の必然性が證明されるのである。けれども理性其のものは、觀念の必然性の外には、其の觀念に對應するところの實在性を示すことは出来ない、信仰の必然性であることは、哲學で證明され得るが、而も信仰其のものをば認識の形として現はすことは到底爲し得べからざるところであると説いたのである。

以上はヴントに於ける哲學説の梗概であるが、序に一つ彼れの心理説の綱目だけを掲げることによし、之れはヴントの心理學概論から見たもので、彼れは先づ心理學の定義を定め、從來の定義であるところの、精神進行を現

象と見做し、是等現象からして、其の基礎たる形而上學的精神本體を推究論定するところの靈魂の學、及び內的經驗の學であるといふのを否定して、心理學は自然科學と並立し、且つ之れを補ふところの一般科學であるといひ、言語學、史學、國家學、社會學などの精神科學も、心理學を基礎とすべきものであるとし、心理學もまた一般精神科學の例によつて、經驗の直接實在を攻究するものであるとした。

之れを要するにヴントは、心理學は直接經驗としては天然科學の補助科學であり、また直接經驗の學として他の精神科學の基礎學であるといひ、また此の學は主觀客觀の兩方面を包容して、哲學の基礎即ち認識論倫理學の攻究に於て最も重要であるからして、哲學に對しても、豫備的經驗學たるべきものであると言つて居る。

ところでヴントは、其の心理學を五つに分けた、則ち第一に精神要素、第二に精神複合體、第三に精神複合體の聯結、第四に精神の發達、第五に精神

因果律と其の理法であつて、之れを第一編乃至第五編として説述したのである。

で第一編精神要素に於ては、精神經驗の内容は、複合的性質を有するものであつて、开が精神要素と稱せらるゝところのものは、分析の結果であるばかりでなく、是等の要素が、實際に於て別種の方法で相結合する事實によつてのみ爲し得らるゝ抽象の結果であるとし、精神現象の分析上からして、精神要素を感覺要素(單に感覺とも)と感覺要素(單に單一感情とも)との二つであるとし、是等二つの要素には、其の共通の性状として、「質」及び「強度」なる二つの限定性が附屬さるゝもゆであるとした。

夫れから感覺と感情を區別する根本特性としては、感覺は直接に客觀に關聯し、感情は主觀に關聯するとなし、また感覺の質は最大なる差異によつて限られるし、感情の質は最大なる反對によつて限られるものであるとした、夫れから感情の重なる方向として、快不快の感情、興奮的及び沈靜的的感情、

緊張及び弛緩的感情の三つを擧げた。

夫れから第二編の精神複合にては、精神複合體は、一つの直接經驗であつて、比較上獨立の一個體と認められ、且つ必要の場合には、之れに特殊の名稱を付して他の直接經驗と差別し得らるゝところの複合的心意狀態であるといひ、此の精神複合體は、精神要素則ち純然感覺と單一感情とに分解することが出来る。

而して全く純然感覺から成り立つか、或は全く純然感覺のみで成り立たないにしても、主として之れから成り立つところの複合體をば表象と稱する、而して主として感情要素から成るところの複合體をば、感情と稱するのである。

ところで此の表象には、内包的表象、空間的表象、時間的表象の三種があるし、感情進行にも、内包的感情結合、情緒、意志進行の三種があると説き之れ等に一一詳細なる説明を附して居る。

次に第三編の精神複合體の聯結に於ては、其の聯結につき、意識及び注意、聯想、統覺的、結合、精神狀態の四つに分つて論じて居る。

ソコデ彼れが下した意識の定義を見るに、各々の精神複合體則ち心像は、多數の要素的精神進行の結合から成るものであるが、此の要素的進行は、或る一瞬間に顯はれて、直ちに止むものではないからして、彼等の結合も亦其の瞬間外に廣がり、従つて種々な心像（則ち同時的繼續的複合體）は、また前の結合に比べては、やゝ緩慢な聯合をする、此の精神複體即ち心像の聯合をば意識といふのであるとし、更に此の意識には、一個人の精神生活現象に經驗さるゝところの個人意識と、此の個人意識に等しきところの聯合が、個人の聯合したものに現はるゝところの集合意識（或は社會意識ともいひ、又は團體意識ともいふ）との二つがあるとした。

夫れから注意といふことについては、精神内容を明瞭に識得する時に生ぜらるゝ、特殊の感情を有する状態を注意といふと定義し、また統覺について、總て精神内容を明瞭に識得せしむべき或る進行をば統覺といふのであるとし、之れに反して、注意の状態でなくして、精神内容を識得するのが知覺であるといひ、更に精神状態について論説したる後、第四編に於て精神的發達を説いた。

而して第五編に於て、精神の原因律及び其の理法を説いたのであるが、茲に於てグントは、心意の概念、心理學上の關係法則、心理學上の發達法則の三章に分つて論説したのである。

夫れからグントの倫理説であるが、彼れは第一に原始的道德的意識（謂ふところの道德的生活の事實）を論じ、第二に道德に關する科學的攷察（哲學的道德體系と歴史的觀察及び一般批評）を論じ、之れを基礎として、有らゆる一切の道德的價値の原理を求め、之れを證するため、道德的意志、道德的動機、道德的規範に分つて論じたのである。而してグントは其の倫理學の研究には、歸納法を採用したのであつた。

グントは自ら從來の倫理説を大別して二つとなした、則ち先天主義と經驗主義であるが、彼れは斯く大別すると共に、夫れ自身に於ては、此の二つの主義を調和すべき立場にあつた。

ソコデまづ先天主義は何うであるかといふに、道德律の命令するところは、其の結果如何に關せず、其れ自身に於て遵奉するべきものであるといふのであつて、眞の道德的の價値は、義務のために義務を盡すといふ意志と、他を顧みることなく、善のために善に邁進するといふ意志であるとされる、之れは謂ふところの無上命令の説で、斯くの如きは吾々が先天的に具有させられつゝあるとの説なのである。

で一方の經驗主義の方の説では、元來善といひ惡といふところの道德的概念は、經驗的關係に本づくものである。

故に之れは變化的のものであるといふのであつたが、グントは此の二つの説に對しては、其の何れをも排斥したのであつた。

而して其の先天説に對しては、道德的概念は、時と處と位を異にするに従つて變するもので、之れは經驗的事實である、即ち先天的に與へられたものではないと言つた。

夫れから經驗説の方に向つては、吾々の道德的概念は、人類の社會的生活と、深い關係を保つて進化し發展するものである、決して偶然的に變化するものとは見られないと言つて同じく之れを排斥したが、斯くして彼れは、彼れの意見を主張した。

其の言に據ると、道德的概念は、人類を以て其の成員となすところの、社會精神の發展の、必然的に一定の法則に従つて生じた結果である、則ち社會の發達と共に、社會精神は變更し、また發達し、此の社會に神の發達と共に道德的概念は變化し發達するものである。

詮ずるところ各個人が有して居るところの道德的概念は、社會精神によつて規定されるが、斯くして道德的概念は、社會的性質を帯び、社會心と稱す

る精神活動に規定せらるゝのであると説いたのであつた。

第十一章 キンデルバントとリッケルトの哲學

價値の哲學……價値判断……規範的法則……不許不……認識價値……先驗的
觀念論

カントが主張したところの、實踐理性の優先といふ思想に、直接の關係を有つて居るものに、價値の哲學といふのがあつた。

此のものは、眞なるものは善なりといふ點に於ては、實用主義と異つたところはなないが、實用主義が、道徳法と經驗論の立場から見、斯くして實益と便利とを道理の標識としたのに對し、價値の哲學は、無上命法思想に基いて、義務の法則を普遍的規範と認め、而して一切の判断をば、客觀的價値の肯定であると考へるところに、兩者の異つた點が見出されるのである。デ此の價値の哲學の上に立つて、普遍的價値の學としての哲學を打ち立てたものにキンデルバントがある。

キンデルパントは、批判哲學を見て、必然的普遍的價值の學と見たのであつたが、同時に是れ等の普遍的價值は、此の哲學の對象であつて、批判主義は其の方法であるとした。

夫れは普遍必然的眞理價值を有する學なるものがあるか、または普遍必然的美價值を有する藝術なるものがあるか、乃至はまた普遍必然的善價值を有するところの道德なるものがあるか否かを吟味し調べるのである。

而して我々は、二つの表象的要素間の適合を表はすところの判断と、判断を行ふ意識と、表象された對象との關係を表はすところの他の種の判断則ち價值判断とを區別しなくてはならないのである。何故であるかといふに、之れは、白いといふ判断と、之れは、善いといふ判断に就て、文法上の形から見るときは、同一のものであるけれども、其の意義を考査して見ると、此の二つのものは、根本的に相異つた判断なのである。

則ち純理的判識に於ては、吾々は兩要素の間に、一つの關係を立てるので

あるが、併し夫れ等の要素の價值についての考想を交へることはしない、價值判断に於ては、其の關係に對して普遍的妥當性を肯定するかまた否定するか、この價值判断は、確定した目的をば測定の標準とするものであり、斯かる目的を認めるものに對してのみ意義あるものであり、適する適せぬ或は褒貶とか容拒などの對偶を以て吾々に臨むものであるが、斯る判断こそ、やがて哲學の對象であると言ひ、サテ哲學の職とするところのものは、自然科学のやうに、事實の自然的必然を規定するものではなくて、萬人が萬人眞として認容しなければならぬところの、不許不を規定するにあるとする、けれども是等の評價作用をば、決して個々の快樂や苦痛の感情と同一にしたり混同してはならない、夫れは生理による牽引や拒否でなく、普遍的規範に従ふ判断なるが故である。

トは言へ斯かる判断であるにしても、時と處と共に變化するところの社會狀態の産物であるから、單に相對的價值を有して居るだけのものであると言

ふものもあるかは知れぬが、併しながら翻つて此の相對主義の眞であるか偽であるかといふことを究めて見ようとするときに、何うしても思惟の普遍的規範をば認めぬ譯には行かぬのであらう。

ところで規範的法則なるものは、自然的因果的法則とは、頗る其の様子が異なつて居るのであるが、併し夫れだからと言つて、何も夫れがために規範的法則の價值を減ずるものではない。

元來此の規範的法則といふのは、當然斯くあるべしとするところのものを確立するものであつて、何も其の事物が必ずしも實際的に、且つ十分に、實現されて居なければならぬといふものではない。

夫れからまた思惟的法則は、表象聯合の法則と同一のものではないが、ト言つてもまた全然夫れと反對のものでもない、眞實の聯想關係も、誤謬的の聯想關係も、之れを規定せるところの自然の法則に於ては、少しも變つたところはないのである。

で眞と偽との上に考想すると、此の二つのものゝ區別は、理想的規範に一致するか何うかといふことに存するのである。

實際に於て眞理なるものは、數ある黒球の中に於ける唯一の白球でなくてはならない。

また吾々の心的作用なるものは、美にもあれ、醜にもあれ、正にもあれ、誤にもあれ、善にもあれ、惡にもあれ、何にても惹起すことが出来るのであるから、夫れ等の價值をば一々に判別するといふことは出来ない。

ところで規範なるものは、直接的明確といふことを以て、其の承認をば經驗的意識に強要するものである、が之れに就いての因果的説明は素より不可能であつて、生成的心理學は、たゞ單に、規範が如何にして、また如何なる程度まで實現されて居るかを示し得るだけに止まつて居る、夫れは事實の問題を決することが出来ても、權利の問題を決するには足らぬのである。

批判哲學の假定は、普遍妥當的目的と、この目的を認識する人間意識の能

力に對する信念である。

彼の批判的方法の目的論的特性を高唱したのは、實にフイヒテの大なる功績と言ふべきものであるが、併しまた、目的の規定からして、その實現の手段までも演繹しようとしたのは、またフイヒテの大なる誤りでなくてはならない、夫れは規範なるものは、素より經驗にのみ依つて立つものではないのであるが、併し夫れが明確なる意識を擱まされて來るには、何うしても經驗に俟たなければならぬのである。

思惟なるもの、开が全活動の唯一の目的は何であるかといふに、夫れは疑ひもなく規範の實現に存するのである。

夫れから普通に對象と呼ばれるものも、畢竟表象間の結合としての規則に過ぎぬものである、そして此の規則が、絶對獨立の實在に對應するか何うかなどいふことを知る必要はない、たゞ一つの規範に従つて、表象結合の或るものは真であるとされ、或るものは偽であるとされる、一體真理の概念とし

ては、必ずしも表象と事物の一致を意味するものでなく、つまりは單に表象と表象との間の、相互的調和を意味するものである、で、また學理と事實の調和をも意味するのである。

直接に確實なるものは、感覺と一般原理又は公理であるとする、認識なるものが存し得らるゝがためには、是れ等の感覺をば、原理によつて論理的に整理することが出來能ふといふことを假定しなければならぬ、實際に於て認識の此の二つの要素は重要なものであつて、決して之れを缺くことは出來ない、全然演繹的である知識とか、全然歸納的である知識とかいふやうなものは、素より有り得るものではない。

でまた此の公理の價值は如何といふに、之れは普遍的目的によつて規定されるものであつて、吾々が此の目的に向つて到達しようとするには、何うしても此の公理を無條件に承諾しなければならぬのは勿論であるが、夫れかといつてこれらの公理を、經驗的生成的に説明するといふことは不可能である。

認識に向つて、價值と意味とを與へるものは、たゞ普遍的目的があるのみである、で思惟が一つの道德的義務であると考へられた時に、始めて此の目的が達せられるのである。

而して又思惟活動に際しては、道德力が外的印象や、個人的利害や、想像の誘惑などを制止するのである。

夫れからまた彼れは、永遠の相としての世界の知識などは無い、吾々の知識は、經驗界に限られて居て、夫れに普遍妥當の感情が、永遠の光りを添へるのである。

而して知といふものゝ上ではなく、道德意識の上に於て、人間の心は永遠に與ふるものでなくてはならない、故に永遠なるものは、知り得らるゝところのものではなく、たゞ體驗せらるべきものであると説いたのであつた。

リッケルトは、キントルバントの思想を繼いだものであつたが、之れは謂ふところの超越的對象をば、不許下に還元することが出來得るといふことを説

明しようとするものであつた。

リッケルトは主観と客観との對立を三様に解したのである、則ち第一には、身體即ち心理生理的主観と環境との對立であり、第二には、意識界と意識外の事物との對立であり、第三には、意識の主観と意識の内容との對立であるとした。

ところで此の見方からして、其の客観には、また三様の意味があるとされるのである、夫れは第一に身體以外の空間界、第二に超越的客観、第三に意識に内在するところの客観である。

ところでこの内在的客観の實在性は疑ふべきものはないが、超越的客観の實在なるものは何うであらうか、言葉を換へて言へば、超越的客観なるもの實在は、直接に確實なものではなくて、吾々自身の歸納觀に過ぎない、ところで此の歸納觀なるものが、果して正しいものであらうか何うか、之れが先づリッケルトの解明を促すべき問題であつた。

意識の全内容が客観であるから、残つたところの主観は、單なる意識でなくはならない、而して決して客観となることがない、普遍的非個人的な意識、言ひ換へれば意識一般であるのだ。

主観の中でもつて、個別的に存して居るものは、残らず意識の内在的客観であるからして、個々の心は、當然超越となることが出来ない、詮じて見ると意識一般は、内在的實在でもなく、超越的實在でもなく、つまりは單に一つの概念なのである。

而して其れはあらゆる内在的客観と、あらゆる意識内容に共通されるところのものなのである、そしてまた超越的客観の形式に對應するところの内在的客観の形式或は種と稱せらるゝところのものである。

ソコデ認識の意味は何んなものであるかといふに、主観とは別な獨立的の秩序其のものを見出すことが出来る、イヤ寧ろ夫れを見出さなければならぬといふ確然とした信念に基づくものである、果して然りとせば、此の秩序は

超越的實在の秩序でなくてはならぬものであらうか。

認識なるものは表象によつて成り立つものであるとしたならば、夫れは實在と比較して見なければならぬ、何であるかといへば、开は實在の模寫でありまた象徴であらうからだ。

けれども之れは何ういふものか、といふのは此の表象なるものは、意識の内容則ち客観であるからして、其所には客観と客観との關係があるだけであつて、認識としての主観と客観の間の關係はないのである。

ところで此の一致を認識しようとするには、主観が何うしても必要のものとなつて来るのだ、而して此の知識は、夫れが表象であつてはならない、何故であるかといふに、それが若し表象であるとする、其所にまた新しい一致を認識しなければならぬことが出来て来て、斯くして何所までも窮りなく進み行つて、實際其の止まるところを知らぬからである。

ソコデ眞の認識は、判断によつて成立されるものである、併し此の判断な

るものは、決して表象の單なる關係ではなくて、實在の肯定或は否定を含むところのものでなくてはならない。

元來認識は、論理的本質に基くところの肯定又は否定であつて、意識の能動的作用に屬するものである。

そして此の肯定といひ否定といふものは、つまり牽引拒斥の一つの形式に外ならない、斯くの如く有らゆる一切の認識が、實踐的性質を有して居るといふことは、やがて夫れが純なる表象とは異なるところのもので、詮ずるところ判断は常に容るゝか斥くるか、又は褒むるか貶すかであつて、つまるところは價值に就ての承諾であるのだ。

茲に價值といふことを言つたが、併し認識價值なるものは、他の價值とは異なるものである。則ち快樂上の價值を評するには、其の時其の所に於ての、其の個人にとつてのみ妥當的であるが、論理的判断としては、其の時の事情などゝは離れた、獨立的の價值を有するものが肯定されるのである。

ところで判断によつての肯定といつても、夫れは決して勝手に行はれるものではない、吾々としては、或る肯定否定を強ふるところの個人外の方に服従するものである。

で此の一切の判断に伴ふところの必然性は、肯定の論理的根據であるから當然因果的必然性と混同してはならないのである。

これは不有不としての必然ではなくて、不許不としての當爲である、そしてまた命令であつて、吾々の意志は判断に於て之れを承認するところのものである。

つまりは存在ではなくて、不許不其のものをこそ、知識の對象である、此の不許不が、吾々の容認しなければならぬところの普遍的秩序を形成するものである。

リッケルトはまた此の秩序に對しては、开をたゞ便利なる分類とのみには考へないで、普遍的規範と一致するところの、主觀の承認如何とは、獨立に妥

當なる秩序なる秩序と考へたのであつた。

夫れからまた、真理は個人の趣味傾向に相對的のものではない、絶對的真理の價値を否定するといふことが、既に其の反面に其の否定の確實を肯定して居るものである。

有らゆる人の判断は誤りであつても、絶對真理の價値なるものが存在するといふ判断は誤りではない。

故に吾々は素より知識の對象としての、謂ふところの超越的不許不を疑ふことは出來ぬのである。

そして懷疑の肯定さへも、之れを必然の條件として居る、存在するのであると判断されたところに、始めて其のものは存在するのであるから、不許不は論理的に存在物よりは根本的な概念でなくてはならない。

またリッケルトは自ら彼れ自身の哲學を稱して、先驗的觀念論と呼んだのである。

夫れは現はされた意識、則ち現前意識の外には、何等直接的のものを認めないのであつたから觀念論であり、意識内容を超越した對象、則ち不許不を認めるところからして先驗的なのである。

經驗其のものが與へた材料さへも、其の然かく認められたる限度に於て、判断と規範とを假定するものである。

有らゆる判断は、其の内容に關して經驗に立脚するのであるが、而も夫れは經驗的には現前させることの出來ない不許不に關係するのである。

夫れからまた知覺なるものは、單に性質の集合であるばかりでなく、超越的規範に應ずるところの必然的關係を含んで居る、また事物の客觀性なるものは、規範則ち表象の結合の規則に成立するものである。

因果の必然的關係さへ、其の客觀的價値をば、理想的規範の認識から得來るのである、理論人と實踐人、そして夫れの知と意の間には反對さるべきものがない、知識其のものにしても、無上命法に基くし、論理的明確は道德的

確實の一種に外ならぬのである。

で謂ふところの必然なるものも、また不許不を基礎とすべきものである。

第十二章 コントの哲學

智識發展上の三階段——社會靜學——社會動學——人類教

佛人コントは、千七百九十三年を以て生れた、彼れの哲學は謂ふところの實證哲學であつて、實證論の見地からして、其の哲學の設立者となつたのであつた。

コントの主張するところによると、個々の科學の外には、何等の學術の存する理なく、随つて個々の科學の外に、哲學と名づけられるべきものゝある理由が無いといふのである。

然して吾々の概念——言葉を換へて言へば知識其のものは、三つの階段を経過して漸次發展して行くものである。

尙ほ詳しく言へば、人の心は其の性質上、相異なるといふよりは寧ろ全く相反した三種の方法に依つて發展して行くものでなくてはならない。

此の事は各々の特殊學の上に見らるゝことが出来るのであつて、而して科學の取扱ふ資料が、複雑であり多様であるに従つて、此の階段を経過して行くのに年月を要するものである。

抽象的科學は先づ定義を事とする階段に達し、然る後に具象的階段に入るのであるが、今や科學の中にて、最も具象的のもの、則ち社會學が此の第三階段に入りつゝある時であると言つて居るが、其の謂ふところの三階段とは、第一に神學時代、第二に哲學時代、第三に科學時代が之れである。

ソコデ其の第一階段であるところの神學的階段であるが、此の階段は實に人知の出發點とされるものである。

此の時代に於ては、人知は未だ客觀的事實を、事實其のまゝには説明することが出来ずに、凡て夫れを不可思議な神の仕業に歸して、夫れで満足して居た時代である。

モウ少し詳しく言ふと、此の時期に於ては、自然現象の凡てに對して、其

の説明の基礎たるべき事實に就いて、其の觀察が極めて狹隘であるところから、自然の勢ひとして、想像力が主要なる役目を演じなくてはならない、則ち自然の現象は、人格體の思ふがまゝの働きをもつて説明せられ、神としての觀念、若しくは靈としての觀念は、事實と事實との繋ぎ糸である觀を呈するのである。

現象なるもの夫れ自體が、神の動作でありとし、または靈の動作であるとして、夫れによつて説明されてあるならば、最早有らゆる一切のものは理解されたものに等しい、隨つて斯かる説明は、絶對的説明と稱すべきものである。

此の神學的階段は、また庶物崇拜、多神教、一神教の三つの小階段に分たれる、庶物崇拜に於ては、自然は人間の如くに、靈魂を具へて居るものと考へられる、夫れから其の自然物其のものは、直接の生活を奪ひ去られて了つて、見ることの出来ない神靈が夫れに代り、斯くして其の運動や變化を司る

に至ると、則ち多神教である。デ數多の神は一神教其のものに於て唯一の神に合すると見るべきものである。

而して神なるものは、世界を創造し、夫れを保存し、夫れを支配し、時としてはまた奇蹟を以て自然其のものゝ進み行くことに干涉すると解されるのである。

第二には哲學時代であるが、之れはまた形而上學的階段とも稱せられる。此の時代は人間の知識はやゝ發達して、或る理法を立て、客觀的事實を説明しようとして試みた時代で、勿論未だ何所かに、理知を煩はさなければならぬ空想が、多分に有せられて居る時代と見るべきものであるから、之れは正しく過渡の階段であり、變化の階段であり、而してまた一面には破壊的の階段と見るべきであつて、何方かといふに、觀察よりも推論に重きを置くものであつた。

詳言すると此の階段に於ては、抽象的概念が、現象の根柢を成し居るとこ

ろの、眞の實在であると思惟せられ、而して世界の説明に使用せらるゝのである。

夫れから現象の種類があるだけに、夫れだけに特殊の力がある、之れを例すれば、生活力、化學力、醫治力などの如きが之れであるが、之れ等の力は、一つの原力に還元される、之れが則ち謂ふところの自然である。

ところでまた此の自然なるものは、いくらかの好惡則ち好き嫌ひを有するものと考へられ、而して現象は、自然夫れ自體の、空虚の恐れ、飛躍の嫌ひ、圓滿への傾き、などによつて説明されるのである。

ところで以上の二つの階段に共通であるところは、世界の絶對的説明を求めようとする傾向である、神學も哲學も、共に世界其のものゝ奥の奥までも洞察し、有らゆる一切の事物が、如何なる本源から發し、そして夫れがまた如何なる終局の状態に終るのであるか、そして更にまた夫れは如何にして産出現前せられたのであらうか、又何故に夫れが存在するか、其の存在が何の

爲めであるかなどいふ疑問をば、餘すところもなく解決しようとするものである。

夫れから第三の實證的階段であるが、此の時代には、想像も議論も残らず排斥されて、たゞ觀察のみを以て主とする、則ち至るところ絶對を排して、相對を主とするといふのが此の階段に於ける唯一の特徴とされるのである。で之れを實證哲學時代ともいふが、實證哲學といふのは、實證的認識を以て唯一の認識となし、さて斯る認識を組織して一系とするところのものである、そして實證的認識は、一つの事實として與へらるゝところのものから出發して、其の法則を探求するものである。

一體吾々としては、現象の本質をば認識し得るものではない、また其の第一原因をも、究極目的をも認識することがない、吾々が認識するところのものは、たゞ現象の法則と、事實間の恒常關係ばかりである、有らゆる一切の認識は、全く關係の認識なのであるから、夫れは取りも直さず相對的であつ

て、絶對的認識は決して爲し得るところではない。

けれども吾々の認識が、現象の共在繼起に限らるればとて、決して悲しむべきものではない、なせ然うであるかといふに、眞に有益なる認識なるものは、全く現象の共在繼起のものにあるからだ。

法則の認識は、吾々をして、現象の將來の開展を豫知せしめ、随つて夫れに對して、豫め用意し備ふるところあらしむるものである、故に實證論の標語としては、先見せんがために見る、といふのが唱へられる。

夫れからまたコントは、實證論は形而上學的思辨をば残るところなく排斥するけれども、之れを以て決して經驗論と混同してはならないと説いて居るのである。

個々の單獨なる經驗は、常に用ふるところがないばかりでなく、又實に不確なものである、實證的認識は、徒らに事實をのみ積み重ねるのではなくて、結びつくるものであることを忘れてはならないのである。

故に其の對象とするところのものは、事實其のものではなくて、事實の法則であるのだ。

各科學は、以上の三期を經過するといふものゝ、其の開展には遲速がある、則ちコントは、實證的時期に到達したる歴史的順序に従つて、科學の分類を試みたのであつた。

で第一には數學、第二には星學、第三には物理學、第四には化學、第五には生理學、第六には社會學であるが、彼れは心理學をば、生物學及び社會學の一部分に於て論じた。

ソコデ此の順序は、之れと同時に現象が單純から複雑に進み行く過渡を示すのである、科學の内容が單純なるほど、其の開展は一層速かなものである、又認識さるゝ關係は、單純なるほど、一層普遍的である、ナゼなれば單純なる關係は、複雑なるものゝ中に包含さるゝからである。

また數學の法則は、有らゆる現象に對しての効驗がある、之れに反して最

も具體的である生物學及び社會學は、其の領域最も狭いものである、夫れから序列に於て先だつところのものは、則ち一層普遍にして、單純なる科學は後のもものが一層特殊であつて、複雑なるものゝ基礎をなすものである。之れを例するならば、彼の生物學の如きは、社會の基礎學であり、數學は一切の科學の基礎となるべき學問であると説いた。

扱又コントは、其の著述の過半を以て、社會の科學と唱へられる。彼れの創始に出づる謂ふところのソシヤロジー（社會學）の研究に委ねたのであつた、則ちコントは社會學の開祖であるのだ。

デ彼れの社會學を通過すると、夫れは社會の一定不變の制約を攻究するところの社會靜學と、社會の進歩的發展の理法を攻究する社會動學の二部に分たれて居るのである。

社會靜學の根本概念は、秩序其のものにある、而して社會動學に於ての根本的概念は進歩其のものであるとする。

而して此の靜と動との二學の間には、密接なる關係が存せられると見る、何故に然るかといふに、元來秩序と進歩とは、相互に依從し制約するものであるからで、此の兩者は決して須臾も相離るべからざるものであるとされる。そこで社會靜學に就て見るに、社會は渾一體をなして居て、开を組織するところの諸の要素は、相互に離るゝことの出来ない、密接なる關係を有して居る、随つて是等の要素中の、何れかゞ變化した場合には、必ずや他に應分の變化を與へなくてはならない。

彼の政治的社會的組織は、人文の全き状態と密接なる關係を有するし、また慣念習慣制度などは、相互に緊密に聯關する。

ソコデたとひ如何なる主權であつても（革命的であるにしろ、反動的であるにしろ）社會に普遍された觀念と慣習其のものに合致することがなくては社會の制度に何等の變更をも與へることは出来ぬのである。

勿論制度は、觀念や慣習などに、或る程度だけの反動を及ぼすものには相

違ないが、斯かる反動は、人類の思想が尙ほ幼稚なりし時代に於て、最も甚しく起る現象である。

夫れから觀念も慣習も、其の兩者間には素より相互作用をなすものである、政治的制度としての司掌すべき職務は、人類に於ける知的、道德的、生理的進歩からして、自然に發生されて來た社會生活をば、究竟的に統制する上に存せらるゝのである。

ところで如上の進歩發達をなすに當つて、最も重要であつた要素其のものは、結局社會を統制するところの要素となるのである。

社會靜學に於ては、また或る主要なる方面から見た、倫理學が生ずるのである、其の倫理上の法則なるものは、有らゆる一切の人類生活は、聯合性を有するものであるといふことが示される。

で此の聯合は、人類が其の社會的本能に依從する時に自然と現はされるものである、夫れから社會生活の起原をば、各個人が協同生活をするを以

て、最も利ありと考ふるといふが如き計算にありと説くのは、自家撞着と言はなければならぬ。

何故であるかといへば、利益は或時期の間聯合が行はれた後にのみ現はれるのであるから、利益といふことは、確立された社會生活の原動力となることは出来ないとして、孤立する個人の伶俐なる計算を以て、社會生活の基礎としたる、從來の説明に反對したのであつた。

則ちコントの説くところによるに、人類が社會生活をしようとする本能的衝動は、全く個人的計算を離れて存して居る、則ち感情は知識に先だつものであるとした。

彼れに於ては社會の起原なるものは、男女兩性が分化し、斯くて其の子孫に對する注意が初めて表現された、動物界の階段にあるものとした、けれども人類に於ても、其の最初には尙ほまだ利己傾向の方が、社會的傾向よりは強いものであつたが、コントは此の兩者の傾向の相反を示さんとして、社交

的傾向をば他愛主義と名づけたのであつた。

併しながら社會的傾向となつたからと言つて、何も我慾といふものが、残るところなく除き去り得たといふ譯のものではないのは勿論である、だから此の他愛主義なるものが、他者に對しても自己に於けると同様に、個人的満足を得ようとする衝動が存するといふことを認容するものでなかつたら、開は何等の効果もない、一つの漠然たる愛として終るに過ぎないのである。

けれども其所にはまた一つの究竟的理法が豫想される、則ち其の利己的本能は、從屬的のものとなさなくてはならぬといふことである、ところで之れをして、從屬的のものたらしめようとするには、知識と同情とをば、少しも休止せしむることなく發達せしめなくてはならない。

何が故であるかと言ふに、同情其のものは、知力が營々孜々として、たゞたゞ利己のために働くことを防止するのである、夫れから知力の方は、社會的聯合の感度を強くするものである。

同情的感情なるものは、社會の狀態によつてますます發展するものである。ところで各々の人間は、此の同情的感情をば、全人類を包容するに至るまでに推し擴める、然して此の社交的擴張といふことによつて、自己をば永遠不窮ならしめようとする要求が満足されたのを見出すのである、夫れは何であるかといへば、人類の連續する生活を以て、直ちに夫れが自己の生命の連續されたものと考ふるからである。

社會の單位は家庭であつて、社會組織の傾向は、最初に家庭によつて表はされる（個々單獨なる個人は抽象である）で家庭に於ては、個人則ち自己なるものを超越して、他人の中に他人と共に生活することを認むると同時に、また自己としての、最も強き本能に従つて進むのである、家庭を觀するときは、夫れは最も親密なる社會たるべきものである、則ち家庭なる社會は合一であつて契約ではない。

夫れから家庭には、共働と名づけられるものが行はれるのであるが、併し

之れは、共通の仕事と、分業の必然的歸結たる補充といふことを基礎として成る大社會に於けるほどに主要なものではない、が個人又は家庭のする一定の事業は、要するに之れ則ち社會的事業でなくてはならない、故に此の社會的事業をば指導し督制さるべき力は、一に社會其のものから出るものでなければならぬ。

此の見地に立てば、各社會は必ずや督制を有しなければならぬことが知られる、何故であるかといへば、個人の生活は個人の本能に導かれるし、家庭は同情といふことによつて支配されるのであるが、大社會となると全く之れに反し、必ずや知力によつて導かれるものでなくてはならない、則ち社會聯合、或は知的聯合を要するもので、單に利害の念と、直接同情の一致といふことのみでは、十分といふ譯には行かぬのであると説いた。

夫れから社會動學に就いて見ると、前に揚げた進歩の三階段なる法則は、社會動學に於ての重要な法則である、ところで其の知的發展の種々の階段

と相應して、茲にまた社會的政治的發展としての各種の階段がある、則ち軍政的階段、法政的階段、實業的階段等と名づくべきもので、之れもまた其次第によりて、軍政は神學的階段に、法政は哲學的階段に、實業は實證的階段に當符められるものである。

サテ神學的階段と相對するところの軍政的階段に就いては、元來軍政なるものゝ價值は、政治的團體の必然的制約たる合法と訓練を説示し、且つ之れを發展せしむるにある。

で茲には或る共通の目的を達するがために、必要にして缺くことの出來ない、強制的協力があつて、第一の精神上の現はれが神學的であるが如く、第一の政府の現はれは軍政的であるといふので、之れは素より明白なる事理でなくてはならない。

而して此の階段にあつては、外的勢力のみが聚中され聯合されるばかりである、ところで戦争なるものは、社會が發展する最初の階段に於ての、必然

的制約でなくてはならない。

戦争は奴隸制度を再現せしめ、優者たり勇者たるものが、自由に其の力を揮ひ居るがために、一切の器具が、奴隸から運ばれるものでなくてはならないのであるとする。

夫れから法政的階段（一に社會的政治的階段とも稱すべきもの）であるが、此の階段に於ては、防禦的軍事組織（則ち消極軍政と見るべきもの）が、之れまでの攻撃的軍事組織（則ち積極軍政と見るべきもの）に代つて、好んで戦を事とするといふ精神が、漸次生産を事とする精神に變じて來て、謂ふところの中等社會はますます進歩し、茲に政治上の權利をも要請することゝなるのである。

而して今日に於て最高の地位に立つ法學者の爲すべきところのものは、實に種々の要求に對抗するにある。

ところで此の法政的階段なるものは、今日に現存されるところの社會的形

相であつて、實際漠とした一の過渡期時代を示すものである。夫れから實業的階段であるが、之れは彼の三階段の中實證的階段に相當するものである。此の時に當つては、生産力は、制度の組織、力の分配を決定し、斯くて政治問題は、一轉して社會問題となり、一般民生は、自分自分の面前に迫り來るところの社會問題の解決は、逆も政治的の革命にては成就されるものでないといふことを悟るに至る。

ソコで彼れ等は、有らゆる人類の注意をば、何ものが本來の社會問題であるかといふ問題の解決に向つて集中することを企圖し、斯くして精神の發展の有らゆる機會と、謂ふところの勞働の權利を得べき問題に向けしめんがために、哲學的權利よりは、寧ろ義務を重んずるといふことに同情を齎すのであるが、斯うなつて來たところに、民生と實證哲學との間に、自然の融和が生ぜられる。

人類が聯合して進歩し發展して行くといふことは、其の證明としては、倫

理學（社會靜學に屬するところの）に取つて重要であるばかりでなく、また社會動學に屬するところの倫理學にとつても重要な意義を有するものである。社交的感情なるものが、單に上の如くに聯合して發達するものであるといふことの證明によつて強めらるゝばかりでなく、倫理學の主要なる部分が、動學的基礎によつて決定さるゝものである。

夫れは何故であるかといふに、倫理學なるものは、動物的或は植物的性質とは全く相反する人性の發達に寄與するところが其の目的であるからだ、蓋し倫理學の下す斷定の由つて生ずる前提たるものは、社會動學の範圍、則ち三階段の法則から來るばかりでなく、また吾々が動物の系列を上ることが高きに連れて、其の動物的機能が、植物的機能に比して、大なる優越があるといふことを示す、謂ふところの比較生物學の結果から來るものである。

夫れからまた人類に於ては、其の動物性と相聯關して、人類——言葉を換へて言へば知力——と、社交性が著しく發達する。そこでコントは、人類其

のものに於ても、知力と同情とが、常に發達して行くことを主張し、之れあるがために、個人は漸次に自己を人類と同一ならしむるを得と言つたのである。コントは斯くしてまた知識論に入り、最後に謂ふところの人類教なるものを説き、神や自然を排し、其が代りに人類をば大存在者として崇拜しようとするに至つたのであつた。

第十三章 ミルの哲學

論理學——聯合法——差異法——歸納法——演繹法——證明——因果法——哲學
 概——倫理說——功利主義——民主主義

ジョン・スチュアート・ミルは、千八百六年英國倫敦に生れた。彼れはベンザム(英國人、一七四八—一八三二)ジェームス・ミル(ミルの父、一七七三—一八三六)等より其の思想を受けたものであつて、就中ベンザムの利學書から有力なる感化を受けたと稱せられる、ところでミルの理想とするところは、社會的及び政治的改革であつて、彼は實に十八世の進歩及び啓蒙熱を受け、教育の效力を確信し、斯くて自然的衝動は變化破壊せらるべく、人間の品性は、其の觀念と共に變化すべきものであると思考したのである。

ソコデ彼は考へた。此の改革を爲ようとするには、何しても知識を要する、何故であるかといへば、正當の目的及び之が實現の方法を知らなくてはなら

ないからである。

而してまた此の知識を得ようとするには、當然正しい方法に據らなければならぬといふので、則ち彼れは論理學の研究に従事した、そして自然化學の進歩からして、其所に科學的方法の吟味が起り。其れを心理や倫理や經濟や政治やの上に、また歴史等の精神的なるものの上に、或は道德的學問に對しての適用法の如何なるべきかを考へたものであつたが、同時にまた知識の方法の説明は、認識論の研究から進めなければならぬ。

此の考へからして彼れは論理學の上に立つて認識論を研究したのであつて、随つて彼れの爲したところは、經驗說の認識論の最も完全なる叙述であると言はれる。

そこで先づミルの論理學の所說に見るに、彼れは經驗的論理學を以て、其の幾分かは純粹思考の論理學に反對するものであるとし、また幾分かは純粹論理學の擴大であるとも見たのであつた。

デ純粹の思考なるものは、決して我々の知識を増進させるものではない、たゞ夫れによつて、我々の思考するところに、或る矛盾ありや否やを示すものに過ぎないものである。

畢竟するに新たな真理なるものは、たゞ經驗と觀察とによつてのみ得らるべきものであるとした。

ところで此所に至つて提起される問題は、經驗と觀察とから得られた新たな真理なるものは、如何にして开が眞に新たな真理であるといふことが證明されるであらうかといふことである（勿論ミルに於ては、其の重きを置くところのものは、發見其のものではなくて、證明其のものにあつたのである）。

則ちミルは、真理を得る前に、先づ判斷を明かにし確かならしむるの必要があるとして、論理學に於て究むべきことは、判斷が如何にして起るものであるかといふことよりも、寧ろ眼を轉じて、如何にして其の判斷を證明すべ

きものなりやといふことが重要であるとした、而して一方には彼れは、哲學としての意義と其の實際的價値は、習俗や因襲と戦ふことであるとした、則ち習俗的に採用されて居る意見であるとか、又は自然作用によつて作られた意であるところの觀念聯合などのやうなものは、進歩を阻碍すべき臆斷其のものを除去するがために、是れ等は充分に吟味考究の上淘汰されなければならぬものであるといひ、人類社會をしてより一層の進歩を營ましめんがために、一切の意見をば、謂ふところの經驗を本として證明するところに存すると説いた。

ミルの論理學は聯合法に基くものである、彼の言ふところによると、余は一切の人の死といふことからして、彼れの死を斷定しないのである、斯る場合寧ろ個々の人の死といふことを極めて多數に經驗し、是れを基礎として、此の特殊の人則ち彼れもまた死するものであると結論するものであるといふのであつた。

若しも此のやうに個々の死を數多く經驗することをせず、單に一切の人の死ぬことを知るならば、更に何等の斷定をも導き出す必要がないのである、何故であるかといふに、斯る場合に、彼れが死ぬといふことは、一切の人は死ぬるといふに包含されるからである。

故に余の論斷としては、彼れは死せり、彼れも死せり、故に彼れもまた死ぬに相違なしといふのであると説く。

大前提が權威によつて確立されない推論式は、各特殊から特殊への推度といふことを以て基本としなければならぬ、全き認識作用の出發點は、二つの現象（則ち人と死なるものが）が同時に起るところの事實から成立し、前者が起つたならば、次には必ず後者を豫期し、サテ此の豫期が充たされたならば、茲に是等の經驗を總括して一般的立言（即ち一切の經驗を包含するところの立言）とする、實に不正なる概括作用をなさないとしたら、吾々は之れ以上に出ることが出来ない、であるから一切の推度は、常に特殊から特殊

に向ふものとされるのである。

斯くの如き推度は、小兒の場合に存するものである、一度火傷した経験を有つて居るとろの小兒が、今しも點火されてある蠟燭を見て其の手を退くるといふに當つては如何なる關係が見らるゝか、此の場合小兒は何等かの一般の格率を想起したのであるかといふに然うではない、夫れは寧ろ其の燃ゆる火焰を見たがために、直ちに其の曾て火傷したる苦痛の觀念を思ひ浮かべたに外ならないものである、彼の獸類に於ける推度もまた此の方法によるものであるが、火を恐れるものは火傷した小供にのみ見られるのではなく、火傷した獸類もまた同様に之れを恐れるのである。

ミルの父ヂエームス・ミルは一切の聯合を總括しようとした聯合、則ち接近聯合なるものを説いたが、ミルが知覺からして直ちに觀念なり豫期になり移行するといふことは、全く單なる聯合であつて、之れは充分に説明さるべきものであると認めたところは、彼れの父の説いた接近聯合と同種類のものである。

ある。

吾々はAとBとをば、同時に於て且つ數多く屢々經驗したることによつて、今Aが起つたに際して、直ちにBが起るべきを豫期する、ところで斯かる豫期の場合、其の豫期が妥當であるべきことは、何によつて證明すべきものであるか、言葉を換へて言へば、吾々は何を理由として、或る一つの現象の發生からして、是れとは異なつた他の現象の發生を斷定すべきものであらうか、則ちミルは之れ等に對して、經驗科學を基礎とする四つの方法を探り、之れによつて觀念聯合の正しきか否かを判別したのである。

そこで此の主要なる方法の中、また最も主要なる點は何であるかといふに、夫れは消極的の場合、則ち現象の存しない場合である、そして此の際には、差違法なる歸納法が適用されるのである。

で、もう少し詳しく言ふと、吾々が注意しつゝある一つの現象が存する場合と、其の現象が存して居ない場合とが、唯一の事に於て異なる際、換言す

れば一つの事柄が、前の場合には存在されて居たが、後の場合には存在されて居ないといふことに於て異なつて居る場合があつたとすると、此の事柄に就ては、現象と因果の關係をなすものと考へなければならぬ、則ち該現象の結果なり原因なりである、故にBがAに隨伴することを豫期することが出来るのは、Aが現はれないがために、Bもまた現はれないといふことが示された場合に存するのである。

斯くしてAとBとの關係の法則をば決定するに、積極の場合と、消極の場合の二つの場合が必要とされるのである。

如上のものは、關係が極めて單純であるところから、推度も之れと同じに然かく單純であるが、種々の異なるところの要素が、彼此交叉して共同する場合、則ち關係の錯綜する場合には、先づ此の現象をば、是れ等を構成するところの要素に分析しなければならぬ。

ところで此の分析された各要素を何う扱かふべきかといふに、歸納法によ

つて、是れ等の各要素が、どんな作用をするかを究めなくてはならない、そしてまた其の次には演繹法によつて、是れ等の連絡作用からして、どんな結果を生ずるかを見なければならぬ。

斯くした後、觀察其のものによつて、吾々の結論又は推度が、其の經驗と合致するといふことが示されなくてはならないのである。

之れを要するに全き認識活動としては、三つの要素、則ち歸納法と演繹法、未れから證明とから成るものであるとする。

故にミルとしては、決して演繹法其のものを輕視することなく、寧ろ亦も重要なものとして、此の演繹法が科學に適用するの如何を以て、其の科學の完全の度合を知る表證としたのであつた。

けれどもまた有らゆる一切の演繹法は、歸納法を基礎として、經驗によつて證明されたものでなければならぬとして、彼の何等經驗的基礎無しに始まり、また何等經驗的證明無しに終る時に於けるが如き純粹思考を排斥したの

であつた。

斯く認識の基本であるところの差違法は、一度起つたものは、前の事情と同様の事情が起つたならば、再び發生するやうに、宇宙が此の現象に關聯するものであるといふことを假定するし、また或る一つの現象に關して推度をなす場合には、自然法の一致(或は因果法)を假定するのである。

ところでミルはまた、因果法は直接又は本能から來るものであるといふ、直接信仰なる説に反對した、而して其の説くところによれば、左の如きものがある。

信仰や本能なるものは決して證明ではない、強く而して永久的である觀念聯合なるものは、如何なる反對の證據によつても覆へされないより強き信證なるものを生ずることが出来るのであるけれども、其の強さなるものは、素より證明ではない、夫れからまた人類なるものは、常に因果法を信ずるものであるといふことは、斷じて不可の説である。

彼等は偶然を認識し、現實を以て自由意志に歸するものである、元來吾々は、經驗的科學の效力を證明するために、因果法を以て吾々の研究するところの範圍に有效であると假定するのであるが、夫れであるからと言つて、何も敢て一切の現象にも此の因果法が有效であると假定するには當らないし、またそんな必要も認めない。

之れを例したならば、彼の恒星の運動の如きは、風がなからうとも、また天氣などいふことがなからうとも、一定の法則に従ふことが出来るのであるまた夫ればかりでなく、吾々は因果法なるものゝ效驗性をば、吾々が認識する宇宙以外に之れを推し擴める權利はないのである。

經驗なるものは、何所までもたゞ經驗を基礎とすることが出来るばかりであるから、經驗的科學の眞の基礎なるものは、言ふまでもなく經驗によつて確立さるべきものでなくてはならないし、之れと同時に經驗其のものは、吾が何れほどまでに經驗を信ずることが出来るかを教示しなくてはならない

し、最後には吾々は経験を以て、経験其れ自身の標準としなくてはならないのである。

夫れからまたミルは、因果法を以て、吾々の有する概括作用の、最も廣きものとする事が出来るほどの、多数の経験を基礎とするものであるとし、斯くて若しも狭き歸納法と、此の廣き概括とを配し合はせるとしたならば、愈々益々正確が得らるべきものであらうと言つたのである。

之れを要するにミルの經驗主義は、ミル自身を導きて、論理學の根本原理は、全く經驗にあると想像せしめたのであつた。

如上はミルの論理學であるが、其の哲學説は如何、彼れはハミルトン（英國蘇格蘭の合理論的哲學者、一七八八一—一八五六年）の哲學批評に於て、聯想論を利用して哲學問題を解決したのであつた。

彼れは吾々の有して居るところの一切の信憑は、其の窮極するところは感情であるといひ、此の感情は吾々の意識の最も直接なる直覺的信憑であつて

如何に吾々が夫れを信じまいとしても、到底能はざるところのものである、而して他の一切の信憑は、此の標準に近づけば近づく程確實のものとなるとした。

夫れから認識が先天的の思維命題を豫想すといふ説に對しては、ミルは之れを以て根本的の認見であるとし、絶對的に反對したのであつた、或る命題が、直接に確實である如くに見えたからといつて、何も其の命題が先天的のものであるといふ證據にはならない。

吾々は直覺其のものによつて、何れの認識命題が直覺的であるかを知り得るものではない、或る人が斯かる命題の上に一つの必然的性質を認め、之れと反對であるものは、了解されないものと同一であるとするところの必然性は、夫れを以て其の先天的であること、或は眞理であることの證左とはされない、夫れは何故であるかといふに、吾々として理解することが出来ぬらしく見ゆるものゝ多くは、之れを證して見ると、心理學上の觀念聯合といふ方

法から得て来た特性であるからだ。

故に一方は之れと反對に、吾々には了解することが出来ないものと思はれる多くのものも、終には了解することが可能となつて来るのである、夫れからまた、吾々の思惟上了解することが出来ないものは、實在上あることが出来ないものと同じものでないからである。

小宇宙と大宇宙との間には、本來からして相一致するところのものがあると説かれて居るのは、全く何等の根據もない假定説に過ぎない、外物と其の存在と、自己と其の存在との二つの信證に就ても、心理學としての説明は可能であつて、而も二つの心理學の事實が、其の説明の基本となるのである、ところで其の二つの事實とは何かといふに、可能的知覺の概念を構成すべき豫期或は能力、及び觀念聯合法が之れである。

で心理學的に分析すると、感官的知覺の際には、現存されて居るところの知覺の外に、知覺となることが出来得べき多數のもの、即ち知覺可能性の多

數、詳言すれば或る條件の下に、知覺となつて現はるゝものゝ多數が存在して居ることを表示するものである。

そこで此の知覺可能性なるものは、吾々に取つては謂ふところの常住である、勿論現存するところの知覺は、流轉し或は變化するのであるが、知覺可能性は不變のものである。

而して夫ればかりでなく、此の知覺可能性は、特殊の感覺には關係しないで、寧ろ規則正しい繼起を營むところの感覺群に關係するものなのである。

故に或る稀れな例外を除くの外は、實體や、因果や、活動などの概念は、現存するところの知覺とは結合しないで、寧ろ彼の保證された知覺可能性と結合するのである。

たとひ現存するところの知覺は、知覺可能性の基礎であるとしても、吾々は夫れをば偶性とし、可能性を實在とするのである、が一たび此の二つのものを比較するに、現存するところの知覺は、單に實在の表象たるに過ぎざる

ものである。

ミルは其の倫理説に於て、ロック、ハッチソン、ヒューム、ベンザム等によつて代表さるゝ英國快樂論派に多く依つたのであつた、彼れは其の功利説に於ては、ベンザムに同じものであつた、幸福則ち最大數の最大善が、謂ふところの最高善であつて、之れぞ道德の標準であるとした。

併し其の他の諸點に於ては、ベンザムとは所見を異にして居たのである、則ちベンザムの言ふところにては、快樂なるものゝ價值は、其の強度、繼續、確度、接近、豊富、純粹、廣潤にある、而して快樂には性質上の別ちがないとし、留針遊戲も詩作と同じく齊しく善なるものであるとしたが、ミルの所謂快樂は大分これと異なつたところがある。

則ち快樂には性質上の別がある、知的の事は感覺的快樂よりは高等なるものであつて、同時に一層善なるものである、隨つて兩者をば經驗したものは、其の高等の方を撰ぶのである。

故に教育あるものは愚者たるに甘んじては居ないし、良心のあるものは我利的であることを欲しない、満足する豚よりも、満足しない人間であるがよろしい、而してまた満足する愚者よりは、満足しないソクラテスとなるがよろしい、愚者や豚は決して然かくは考へて居ないであらうが、并は一方面ばかりを知るからであると言つて居る。

ベンザムが最大數の最幸福に努力しなければならぬといふに對し、ミルの説も亦之れに同じものであつたが、併しベンザムの自利説であるのに反して、ミルのは人類の社會的感情からして夫れを主張したのであつた。

そしてミルの説くところによると、功利説なるものは、自己の幸福たると他人の幸福たるとに論なく、全く不偏不黨でなくてはならないとし、吾人は耶蘇の黄金則中に、功利的倫理の完全なる精神を見ることが出來よう、己れが爲さんとする如く他人に爲し、鄰人を己れの如く愛すといふのは、實に功利的道德の理想的完成であると説いた。

英國のフランク・シルリーは、其の哲學史に、ミルは其の功利説に於ても、反對の説を中和しようと試むるものであつた。即ち一方には其の經驗的聯想心理からして、快樂説、自利説、決足論を採りつゝありながら、一方には直覺説、完全説、他愛説、自由意志説をも採納したのであつた。故に其の説くところに矛盾する點もあつたが、多くの人心を牽き附けるの力があり、同時に反對派として的一致することが出来る點も亦尠なからぬのであつた。殊に其の最大数の最大幸福なる説は、人の行爲及び其の品性を發展せしめるに足るべく、また更に人の理想をして廣き人類なる範圍に向はしむべきものである。

功利説の目的とするところは、畢竟一層善き社會生活を實現させるにある。蓋し各人は、此の社會生活中にあつて、責任を有するものであるからであるといひ、更にミルは英國に於ての自由主義の哲學的代表者であつて、大に民主主義を論じ、其の著書なる「自由」及び「婦人の服従」に於て、與へ得らるゝだ

けの個人主義を主張し、其の「政治經濟」に於ては、經濟的個人主義を唱へたのであつたが、遂に究竟進歩の理想は、民主政以上に出づと言つて、社會主義に接近したと附け加へ、終りに彼れは又人性の能力を信じて、教育、習慣及び感情の訓練に依つて、能く普通の人をして其國のために戦ひ耕し且つ織らしむることが出来ると見做したと言つて居るのである。

之れを要するに、ミルは、其の父なるゼームス・ミルの心理學を基礎として、論理學を攷究検討し、ベーコン以來頻りに研究せられたる歸納法を完全ならしめ、哲學の方面に於ては、ロックやヒュームの經驗主義をば、觀念聯合によつて再造し、同時にまた客觀的實在を否定して、主觀主義的と見るべき學説を唱へ、更に其の倫理學の方面に於ての學説としては、ペンザムの説きたりしところを繼承して、其の功利主義をば人間的社會的に發揮したのであつた。

第十四章 スペンサーの哲學

第一原理——三説の證明——哲學とは何ぞや——進化論——素中——分化——
確定

ハーバート・スペンサーは千八百二十年を以て英國ダービーに出生した、彼の哲學體系は、第一原理、生理學原理、心理學原理、社會學原理、倫理學原理の五部から成り立つて居る、で今は其の全體系の基礎をなして居るところの第一原理と其の進化論を説述することにする。

其の第一原理の前半の部分は、主として「不可認識的のもの」なるものが取扱はれて居るのである、で、其の根本の思想とするところのものは、吾等の認識なるものは、相對的のものであるといふことである。

則ち吾々は、如何なるものをも、絶對的に即ち其れ自身に於てあるが如く、認識することは出来ないといふにあるのだ。

ところで斯うした思想は、素々プロタゴラスより以來、多くの思想家によつて唱へられたものであつて、決して新しい説とはいふことが出来ぬのである。

併しスペンサーとしては、寧ろ此の説によつて、宗教と科學との調和を企圖したものと云ふべきものである。

夫れから精神界としての争ひの中で、最も古いものであり、最も廣いものであり、最も深いものであり、また最も重いものであつたのは、夫れは言ふまでもなく宗教と科學との間に存せられて居るものである。

ところで古來よりして、人の心を支配して來たところの此れ等の精神的勢力が、全然誤謬に基づいて居るといふことは、素より容易に思惟されるものではない。

されば此の兩つのもものは、誤謬といふ殻の下に、眞理といふ核子を有するものであつて、従つて其の眞理に於ては、當然全く相符合するものでなくて

はならない。

夫れで其の眞理なるものは、勿論宗教の一定の教義、或は科學としての一定の學說などではなく、寧ろ此の兩つのもに共通的地方であるところの、最も抽象的な、随つて最も普遍的な眞理其のものでなくてはならないのである。果して然らば、其の眞理といふのは何んなものであらうか、之れを宗教の上に於ける根本問題としては、此の世界は何であるか、而してまた何れから來たものであるかといふことである。

で此の問題に對しては、人格神教であれ、萬有神教であれ、將たまた無神教であつても、各々其の思ふところに従つて此の問題に回答を與へたものであつた、然るに夫れ等の解答は何んなものであつたかといふに、事實其の豫期するところに反して、殆んど何等の内容すらも無い、取るところのない言葉争ひといふ體裁であつた。

勿論夫れとても、單に打ち眺めたところでは、如何にも深遠であり幽玄で

あるが如くに見えるのであつたが、詮ずるところ其の實は矛盾の充ち満ちたるものであつた。

で是等の三説が與へた説明なるものは、みな失敗に了つてしまつたのであつたが、而もまた彼れ等は、みな同じく一樣なる眞理を示したものである。夫れは如何なることであるかといふに、何れも異口同音に、世界は説明を要すといふことである。

で之れに由つて見るにも、凡ての宗教的傾向に共通であるところの元素は實に茲に存すといふことが出来るのだ、各々其の信條に於て、相互に最も鋭く矛盾するところの宗教ですらも、世界（夫れとまた夫れに含まれたもの、及び凡て夫れを圍みたるもの）の存在が、絶えず解釋を要求する一つの祕密であるといふ冥々理の信念に於ては、實際全く相一致されて居る。

而して宗教と科學とが、眞に調和せらるべきものであるならば、其の調和の基礎たるべきものは、此の最も深くあり、最も廣くあり、最も大である眞

理（之れは世界に於て、吾々に發現する勢力は、絶對的に不可認識的であるといふ眞理である）其のものに求めなければならぬのである。

そこで科學もまた、此の眞理に屈服しなければならぬものであることをば、スペンサーは次の所説の如くにして證明したのである。則ち第一には、空間、時間、運動、物質、力、我などいふ科學の根本概念を分析する時には、主觀的並に客觀的世界の本質及び本源は、全く理解すべからざるものであることが見られるであらう、ところで此等の根本概念は實在の標號であつて、其の認識の本性が然らしむるところであるといふにある。

夫れから第二には、今思惟の産物を分析するに、説明が深く入り、認識が進歩するのは、特殊的眞理を普遍的眞理に引包みつゝ進み行くのに存するのである。

で此の進行は、終には最も普遍的であつて、又最も高等なる眞理に達して止むものである。

然るに最高眞理は、更に夫れ以上の眞理に引包まるゝことなくして、同時に夫れは理解したり説明したりすることが出来ぬものであると説かれるものである。

次に第三には、思惟の進行なるものを分析するに、吾々の思惟は、反對、差別、類似の三つによつて制約されつゝあるのを見る、則ち何等の反對もなく、また他の何れのものよりも差別することが出来ないものであるならば、決して思惟さるゝことが出来るものではない、そして又他方に於て、吾々の認識は、類似の關係を豫想する、何であるかといふに、吾々は一つの物をば、其れに類似した他の物に還元しつゝ認識するものである。

世界の本質である絶對者は、絶對者として一切の關係對待を絶するものであるから、以上三種の關係の下に立つことは出来ない、故に三重的に不可認識的である。

則ち此の故に宗教と科學が一致するところの最高眞理は、吾々は相對的認

識、則ち關係の認識を有して居るばかりであるといふところにあるが、宗教にしては認識たらんことを欲しないし、科學にしては絶對的認識たらんことを欲しないが、相共に彼の最高眞理を承諾し服膺することゝしたならば、恒久の平和は期して待つべきものであらうといふのであつた。

如上是謂ふところの第一原理の前半であるが、扱て其の後半に於ては、スペンサーはまた哲學とは何であるかといふ問題を提起したのであつた、そして科學は部分的に、哲學は完全に、統一されたる認識であると答へたのであつた。

そしてまた彼れは、一切現象に通ずる眞理として、進化の法則を確立し、又進化の特質に就て、其の詳細なる論説を試みたのであつた。之れを要するに、スペンサーの哲學的體系の中心となるべきものは、其の生物學であつた、彼れはダーウインに先だつて、種の本源を自然的進化に由つて説明せんと企て、後進みて進化の法則を心理學に應用し、終に之れを一切の現象の根本法

則となすに至つた（ダーウインの偉功は進化の原因として自然淘汰を發見したのにあつて、進化其のものは、決して新規の思想ではないのである）

そこで其の進化論なるものは何うか、スペンサーは考へる、哲學の目的であるところの、認識の統一といふことは、有らゆる一切の研究が、同一の假定を基礎とすべしといふ證明では、まだ可なりといふことは出來ないのである。

で當然經驗界に起つたところの、一切の現象を支配するところの法則の存在を證明しなければならぬ、此の考へからして、彼れは實證主義をば一つの體系とするために、一部は一切の實證的知識（則ち事實に關する知識）を一の共通の假定に還元し、一部は實證であるもの、則ち一切の現象に共通するところの一の法則若しくは一の形式を確立したのであつた。

現象はみな發現の歴史を有して居るものである、言葉を換へて言へば、現象には夫々に生滅があるので、科學は自己の範圍内に屬するところの現象の

或は生じ或は滅するところの來歴を叙述するものである、之れと同時に、茲に之れ等の種々雜多の歴史的進行には、共通の形相が存しては居ないであらうかといふ問題が生ずるのである。

何故であるかといへば、其所に若しも共通の形相が存して居るものとすれば、茲に謂ふところの進化なる普遍的法則を作ることが出来るからである、勿論發達といふことには、多少分明に此の三つの特異なる性状が存せられるが、之れを綜合する時には、進化の概念なるものが生ぜらるゝ。

で、發達といひ進化といふものゝ上には、聚中といふこと、分化といふこと、確定といふことが説かれる。

則ち聚中に就ていふと、現象の起る際には、前に散亂されたる各々の要素が聚合し、そして此れが相互に結合し又歸一されるのである、若し今天空に一點の雲が現はれたとすると、此所に最も簡單な種類の發達が起る、そして此の際に於ての進行は、殆ど全く散亂と聚合とであることが知了されるので

ある。

若しカント等の考へたところに従ふと、我が太陽系が、其の原始的の星雲の状態（則ち太陽系を組織するところの要素）が、廣く散亂されて凝集しない状態から生ずるものとすれば、其所に如上の聚中なる過程が生ぜられるのであらう。

一切の有らゆる有機的生長なるものは、前に周囲の動植物に散亂されたるところの要素が、茲に一たび有機的組織をなすところから起るのである、其れとしての心理學上の一例は、概括作用則ち普遍概念と法則を作ることであつて、吾々は全く此の方法にて、有らゆるさまざまの知覺表象をば聚中して思想とするものである。

で、社會の進化は、主として個人若くは其の結合が緊密でない個人の集合をば、漸次に一の全體として化成することにある。

夫れから分化であるが、發達其のものが聚中進行と見えるのは、最も簡單

な場合にのみ過ぎないのである。

複雑なものとなつては、全體の量に、外部から其の分離を促がすばかりでなく、又斯くの如く分離された量の中に、或る特殊的な聚中が生じ、其の發達がますます進み行くに従つて、之れ等の特殊の聚中が、愈々著しくなつて來て、同時に吾々は、前なる階段と、後なる階段とを比べ、斯くして單より複に、純より雜に進行することが認められる。

之れを太陽系の發達としても、種々なる天體の分離が生じ、而して夫れ等は夫れづゝに、自己特別の性質を有するものである、で、之れを有機的進化に見るに、夫れは單純なる胚子からして、さまざまの組織を有せられ、斯くして漸次に種々の作用をなすところの器官を備ふる有機體に進むものである、そこで確定に就いては何うか、破壊なる過渡的特徴は、從來單純であつた魂其のものに、差異を生せしむることに存する。

此の故に發達と破壊とを區別するために、進化には混亂から秩序、不定で

ある排列から一定した排列に至るといふ特性を認めなくてはならない。

元來發達なるものを觀するに、夫れは散亂されたる單一純粹な部分を有するところの渾沌から、複雑なる部分を有し、且つ是等の部分は、相互に一定の關係を持つて居るところの、渾一體となるところの進行であると言へよう、太陽系であり、有機體であり、意識であり、人類であり、社會であるところのものは、多少にも秩序を有するところの全體といふべきものである、此の第三の立場は、實に如上の二個の立場を結び合はせるもので、秩序を有するところの全體は、部分化と全體化とを備へるものである。

則ち世界としては、また事物の大なると小なるとに論なく、世界の物たり心たるに關することなく、到處に如上の進化的過程は行はるゝものである。

之れを要するにスペンサーの哲學體系は、其の生物學上の觀念からして起り、而して此の生物學上の觀念（則ち分化としての發達）は直ちに其の社會學上の觀念と結合されたものであつた。

第十五章 グリーンの哲學

英國批評學派……新カント派……思惟……意識……道德行為の哲學……善惡の標準……徳と不徳……其の根本思想

トーマス・ヒル・グリーンは、千八百三十六年を以て英國に生れた、彼れは謂ふところの英國に於ける批評學派に屬するものであつて、從來の英國固有の哲學思想、則ち經驗學派を以て不完全なりとし、之れに反對して起つたものであつたが、其の思想は主としてカント、ヘーゲルから得たところのものである、故にまた英國の新カント派とも稱せられる。

彼れは其の倫理學の中に、下の如く言つて居る、此れまで哲學に於て論究した人生問題は、頗る高尚なものであつて、詩想を以て解釋して行かうとする傾向があるけれども、之れは實に不可能である、人生問題なるものは、是非共科學的研究を経なければならぬ、がまた、夫れでは斯くの如き人生問

題は、自然科學によつて解決することが出来るかといふに、英國固有の哲學説を取るものは、之れを可能であるといふが、到底不完全であることを免れないのである。

ところで英國に於ける固有の學説を完全ならしめようとするには、人の良心や、自由や、意志などに對して、物質的説明を與へなければならぬが、斯くの如きことは、科學の爲し得ないところである。

現にヒュームは之れを試みて困難に遭遇した、此故に此の困難を救はんがために、近世進化論が出て、其の進化の原則によつて、人生の諸問題を説明しようとするのである。

けれども之れによつて満足を得ようとするには、先づ第一に自然とは如何なるものであるかといふことを研究しなければならぬと言つて、終に同じく其の智識哲學に於て、自然に關する知識は、其れ自身自然の一部分或は成果たるを得るか、また客觀に關する知識は、客觀たるを得るかとの疑問を發

したのであつた。

有らゆる一切の精神作用が、悉く物質的制約を受くることをば許すにしても、如上の疑問は解かれるものではない、夫れは何故であるかといふに、物質制約なるものも、つまりは經驗の宇宙を組織するところの要素であると共に、此の經驗の宇宙其のものが本來として説明さるべきものであるからだ、神靈的原理が、知識と自然との基本たるべきものでなくてはならないといふことは、詮ずるところ事實とは何であるかといふ疑問に對する解答から生ずるのである。

有らゆる事實なるものは、其の單純であると複雑であるに論なく、之れを哲學的に分析するならば、相聯絡し相關聯するところの、經驗に於ける他の事實との關係から成り立つのである。

則ち之れに由つて、事實は相互關係からして成り立つと言ふことが出来るのである。

普通に有せられて居る思惟其のものは、實有と非有とを區別し、非有を以て吾々の悟性の産するところのものであるといふのを常とするのであるが、此の形式に於ける對立は、事實上何等の權利を有するものではない、寧ろ夫れは迷妄的現象なるものは實有であらねばならぬ、之れは素より主觀の把住せしむるが如き方法にて斯かるにはなく、更に一層高い睿知の理解するやうな方法に依るものである。

非有は單に虛無と言はれるものである、ところで然らば此の非有と對立するところの實有なるものは如何なるものであるかといふに、而も其の實有なるものは之れを定義することが出来ない、心的進行としての知覺なるものは、明確に之れを知覺されるから、夫れだけについて言へば知覺は實有である、けれども翻つて、知覺は實有性を有するものであらうかといふに、其の時に吾々が知らうと思ふことは、茲に一つの知覺される客觀は、夫れは吾々に於けると同様なる關係を保つが何うかといふことである。

であるからして、實有といひ、客觀的といふ記號は、たゞく意識其のものに對してのみ意義を有することゝなるのである。

ところで意識なるものは如何なるものであるかといふに、夫れは經驗が關係に規定されるを見ると同時に、また其の經驗を規定し、或は過去の表象と對比することを得るところの、諸種の關係の單一不變なる一系統を想見するところのものである。

若しも經驗といふことが、變化と云ふ意味であるとしたならば、各々の人が認容することが出来ない、而して夫れによつて、經驗からは産出されないところの體系の概念が此に存せられるのである。

併しながら若しも經驗其のものを以て、進行の單なる繼續の意味に解釋したならば、經驗は變化の進行の意識を産することが出来ないのであるし、之れと同様にまた自ら變化進行の意識となることも出来ないのである。之

で、之れは何が故に然るかといふに、其の變化の意識を産することが出来

ないといふのは、其の場合に當つては、進行の意識が進行の凡ての階段に等分に存して居なければならぬからである。

夫れからまた、進行の意識となることが出来ないといふのは、其のやうな場合に於ては、全き繼續が、同一の時に存して居なければならぬからであるのだ。

吾々が實有界（夫れは單なる假象とは區別さるゝところのもの）を認識するには、たとひ如何なるものにも還元されないところの意識を假定するものである。

夫れからまた、實有のものは不變化的のものである、併しながら斯うは言つても、彼れは決して斯かる不變化性を以て、ロックが説いたやうな、感覺の制約の不變的效果と見たる感覺には歸しなかつた。

そして又一般科學に於ける場合の如く、物質的制約其のものにも歸しなかつたのである。

感覺は不斷的に流動する、物質的制約は經驗の要素であるから、夫れが感覺から抽象さるゝ時には、一切の意識は茲に失はれる。

が元來感覺なるものは、物質的制約からは誘起されない、夫れはカントが考へたやうに、物其れ自體によつて誘起されるのであるから、此に一つの宇宙なるものはなく、寧ろ相互ひに何等の關係するところがない二つの世界が存して居るといふのである。

實有であり、そして不變的であるものは、一切を包容する唯一の關係の系統として表はれるものである。

ところで斯かる系統は如何にして生ぜらるゝかといふに、關係なるものは、一の中に多が存するといふ雜多統一が假定されるから、其所には物の雜多といふことよりも、寧ろ夫れに異なるものが存しなければならぬ。

言葉を換へて言へば、物其れ自體をば、其の特殊性を滅却することなしによく統一し、斯くして物の關係の雜多を作るところのものが存しなければな

らない。

そしてまた夫れを吾々の意識に向つても連結さするところの活動、概言すれば結合的能力なるものが存せられ、之れに由つて二つの感覺は、謂ふところの繼起關係を生ずるものである。

そこで若し斯様の事が無いとしたならば、夫れ等の感覺は全く分離されて各別のものとして存在されるか、夫れでなければ相互ひに全く融合さるゝのである。

本來からして言へば、世界は何も吾々のみに對して實有であるといふことは出来ない。

他の意味に於て、また他の方法に於て、夫れが實有であるならば、關係系統としての世界は、實有の制約としての吾々の悟性の作用に類似された、或る統一的原理によつて産せられたものでなくてはならないのである。

夫れからまた、自然界の事象が、相互に時間なり空間なりの上に關係を保

持すといふことは、素より其の時間なり空間なりを超越するところの、或る主體に對して、一般的に關係するものであるといふことが假定されよう。

夫れから普遍的意識なるものと、吾々の意識との關係は何うであらうか、認識なるものは、素より全體のものでなくてはならないし、認識されたる物は、此の物によつて活動が起さるゝところの、自己區別的意識に、其の悉くが同一の時に現存しなくてはならない。

で、時間の制約たる、従つて時間の制約を受けることのない一般意識は、時間其のものを中性化する作用者と見ることが出来る。

然るに吾々の意識なるものは、勿論其の事實として、時間内の歴史を有して居るのであるから、之れは何うしても、彼の時間を離れたものとしての意識の特性に對しては、茲に其の矛盾が見られるのである。

グライムは之れに對して左の如き説明を試みたのである。

吾々の經驗の發達、則ち吾々が世界を認知するところの進動は、時間内の

歴史を有するところの動物の有機體が、漸次に完全なる永久意識の支持者となる進動に外ならない。

此の説明によつて見ると、吾々の精神的發展なるものは、決して吾々自身に一つの歴史をも有しないところの、此の永久意識の歴史ではなくて、動物の有機體が、永久意識の支持者となるところの進動の歴史であると説いたのである。

グライムはまた道徳的行爲の哲學に於て、人生としての一面を觀察したのである。

人間は物質的有機體として、其の心の上に、常に二つの事實が見られる、則ち一つは印象であつて、一つは衝動である。

衝動といふのは、需要と其の需要を満足せしめようとするところのもので、之れもまた印象と同じに單に物理的事實と言ふべきものである。

が人間の道徳的自由は、必ずや或る行爲をなさんとの動機の性質に従ふも

のである。

ところで此の動機なるものは、一つの目的觀念であつて、自然的主體が、目的として夫れを自己に表象すると共に、其の主體が之れを實現させようと勉むるところのものである。

感性的印象の存在からして、對象の認識が起るやうに、動物的需要が起るところに、動機が生起さるゝのである。

で、此の動機を作るがためには、其の需要に、自覺が伴ふことを必要とする。

开は此の自覺なるものは、求め欲すべき對象の世界のために、認識することの出来る事實の世界のために、必要にして、缺くことの出来ない制約である。

夫れから自覺なることが、需要を経験するところから、开は自己と需要とを區別し、需要を以て欲し求めらるゝ對象の要素とする。

人間が自分自己の動機が生ぜらるゝ間は、自由なる行爲者であるとする。で自由なるものは自己規定であるが、自由行動といふことは、動機とするところが無い行爲を意味するものではない。

何故であるかといへば、動機といふことは、行爲の自由を生ずるところの動機となるところの需要の意識的採用であるからだ、ところで一切の意識的行動は、實に動機によつて規定されるものである。

けれども人類は、其の動機を作るからして、随つて人類は自ら自己を規定することになる。

又一方に動機を以て人類の境遇と性格の成果であるとするのは頗る不明瞭のことではなければならない。

寧ろ人の性格が、與へらるゝところの境遇に反動し、且つ之れに應ずる發表であると言ふべきものである。

夫れから行爲に就いていふと、行爲なるものは動機の必然的結果である(勿

論一切の結果は必然的結果である。

が、而も夫れは、行爲者自らに於ては、其の爲す通りにしなければならぬといふ意味に於ての必然的行爲者ではないのである。

夫れから善と悪との標準に就ては、如何なるかといふに、夫れには當然一つの疑問が提起される。

則ち善悪の如何を問はず、一切の人的行動の可能は、永久精神が人格として再現されたことを假定するならば、如何にしてか行動の善であり悪であるといふことを差別するかといふことである。

則ちグリーンは之れに答へて、下の如く説いたのである。

作られた動機が、之れを實現する時に、其の動機の主體の本性が、自己満足を見なければならぬやうなものであるならば、其の意志は善なるものである。

人の本性は、自己意識（則ち自覺）即ち自己であつて、而もまた同時に自

己でないものより成るものである。

けれども人間は、自我と非我との間に於ける相反するところのものを、十分完全には除き去ることが出来ぬからして、則ち人間は完全に其の本性を實現することが出来ない、可能的完全と、自己が事實上不完全であることを、同時に意識することは、其の到達し得るところの最高のものである。

其の動作をなす際に、其の動作は自己の爲ることが出来る最善のもの、而もなほ夫れと同時に、其の爲すべき一層善き事が存して居るのを認むるならば、また彼れは其の動作によつて、自己を實現し、謂ふところの自己満足を見出し、斯くして其の當然あるべく、またあり得るところのものをば、大に隔るものと認むるならば、其の行爲は善なるものである。

で之れに反して、若し其の目的は彼れに取つて欲求の價值ある唯一目的であるとし、且つ其の目的を達した時に、十分に自己を満足せしむると考ふるならば、また或は彼の事實上の自己と、可能的の自己とを同じに見て、事實

上の自己をば絶對視するならば、其の行爲は惡である。

徳といふことゝ不徳といふことは、同様なる行動の成果に本づくものである。

人間が自己(則ち自我)を目的其のものとして意識するからして、其の結果として一方には、如何なる些少のものに於ても自我を發見することが出来る、他の一方には、如何なる大きなものであつても、彼れに完全な満足を與へぬのである。

で最善の生活といふことは、可能的完全の意識が、最も活潑である生活である。

そして自覺的理性の人間に現はるゝや、开は完全なる自己犠牲によつて感ずるところの、完全なる自己満足の觀念によるのであるから、吾々の道德的努力の目的は、全く理性に順應する生活とすることが出来よう。

次にグリーンンの根本理想は、神的原理の實現は、人格に於てし、非人格的

の人類に於てせずといふのであつた。

人格の發展は社會に依從するもので、社會的生活は、人格とは極めて密着であることは言を俟たぬところであるが、民族といひ、或は民族精神といはるゝものは、たゞ各個人に存して居て、各個人の精神を離れての民族精神なるものはないのである。

吾々の求むべき、吾々の道德的標準としては、必ずや人格的價値を以て其の理想としなければならぬ。

人間の精神的進歩は、人的性格の進歩完成である、理想としての完全なる實現は、不完全なる吾人には可能ではないが、人類の發展といふ概念には、漸次に時間に於て實現さるゝところの能力は、永久精神に於て永遠に實現さるゝものであること、夫れから發展なるものゝ目的は、進動の豫想するところの能力を、實際充足するところに存するといふ二つの假定が存する。

善き意志が實現しようとするところの觀念は、絶對的善として表はれ、

且つ吾々に絶對的法則を示す。何となれば其の觀念は、神に於て永久實現を見るべきが故である。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）

第十六章 ジェームスの哲學

プラグマチズム(實用主義)……絶對主義對人本主義……絶對主義對進化論……主知主義對主情意主義……認識問題

ウィリアム・ジェームスは、千八百四十二年を以て米國紐育に出生した。彼の思想は其の生物學的研究、英國經驗說、ルソーの說から影響を受けたるもので、其の一たび探つて來た一元的迷信から超脱し得たのは、全くルソーの多元論辯護に依るものであつたとは、彼れ自身に言ふところであつた。

従來の學說たる唯物論であるとか、唯心論的一元論の宇宙觀であるとか、又は嚴肅的であり、決定論的であるところの學說などは、毫も彼れをして満足せしむることは出來ぬのであつた。

彼れは、若し人間等一切のものが、單に原始の星雲、若しくは無限實體の

結果に過ぎないとしたならば、道德的責任や、行爲の自由や、個人の努力や希望などは何うなるものであらうかと言つて居るのである。

で晩近に於ける哲學思想界の新らしい傾向を養一着するに、开を極めて鮮明に代表するところのものは、實に實用主義であるといふことが言へよう。併し此の實用主義と言つても、其の唱ふる人々によつて、多少其の所説に相違する點があつて、必ずしも一定して之れを言ふことは出来ぬのであるが、之れを今日としては、先づジエームスの所説を中心として、之れに由つて其の主義とするところを窺ふことが、最も便利であり適切なるものとされるのである。

ところで此のプラグマチズム、譯して實用主義と呼ばれるところのものは、如何なるところから出發されたものであらうか、則ち此のものは、其の源流を、英國在來の經驗主義的功利主義的哲學思想に發して居るものである。彼の英國に於けるフランシス・ベーコンが、謂ふところの有らゆる革新運動の典

型的代表者として、當時の一切の教權や希臘の哲學に反對して、「人は其の心眼を開き、事物を如實に看取しなくてはならない」と高唱し「知識は力である」と斷言したところに、謂ふところのプラグマチズムは其の一滴の源泉を齎らすものであつた。

で此の源流は、ロック、バークレー、ヒューム、ベンザム、ミルなどの思想的貫流とされるもので、其の經驗的な、而してまた功利的な思潮が、其の基本的バックを示すものである。

ところで此のものが培養されるには、哲學思想家としての、三つの見地によるものとされる。則ち第一は絶對主義に對する人本主義であり、第二は絶對主義に對する進化論であり、第三には主知主義に對する主情意主義であつた。

そこでジエームスの實用主義的哲學を説く前に、先づ其の前提として前掲の三つの見地に付て、謂ふところのプラグマチズムが育養された徑路を検す

るのは、決して無用のことではなからうと思ふのである。

で、**絶對主義**、**對人本主義**に就ていふと、先づ現實其のものに目覺めて来て、深く自我なるものに注意し出した近代人の精神としては、何よりも先づ大切であるのは、人間としての實生活であるといふことに氣付いたのであつた、そして夫れと同時に、人間の事は、總て人間本位でなくてはならない、そして完全なる人間として生活しようとするには、何うしても人間其のものゝ利害得失をば根柢として、人間の知力を基礎とした上に立たなければならぬ、則ち此の人間の生活をば、完全に導くといふのが、人事としての最も重大な要道であるといふのであつて、つまり人間を本位とするところから、一にまた人本主義とも唱へらるゝところのものである。

そこで斯うして發露された人本主義の思想が、夫れから夫れへと共鳴されて、有らゆる方面に勢力を得、茲に遂に從來の絶對主義に向つて、不信任を叫ぶに至つたものである。

則ち此の主義を奉ずるものから言はせると、謂ふところの絶對なるものは（勿論眞理や實體を引くるめて言ふのである）如何にしても得體が知れないものである。其様なものを定立して、夫れに人間を無暗に服従せしめようといふのは當を得たものではない。

元來人間なるものは、決して實在や眞理のための人間ではない、人間があればこそ實在があり、斯くして後の眞理であるから、此の人間の欲求次第で、變更がどしどし出來得るといふ世の中に、何も絶對の眞理などがあるべきものではない。

寧ろ吾々人間は、自分自身に適當されるところの、新たなる眞理や事實を創造すべき筈のものであると言ふにあつたが、此の様な思想的傾向こそ、實にプラグマチズムの發生に對する貴重要素であつた。

次には**絶對主義**に對する**進化論**であるが、彼の有名なるダーウインの進化論は、職として生物學上による各種の謬見誤想を打破したばかりでなく、此

の進化の原理を人間生活の全體に擴充することによつて、人間としての意志と目的とが、ために新たな新天地を開拓するものではないといふことを示し、彼の從來からして云爲さるゝところの、眞理又は實在など言はれる、謂ふところの絶對者などは決して存在さるべきものではないといふことを明確にした。

彼れ等の言ふところに依ると、思想なるものは、間斷なく進化して行く外界の事物に適應するための必要な道具であるから、随つて夫れは外界と共に進化するし、また同時に人間に入用なる信仰といふものを與へるものである、だから眞理であるとか、實在であるとかも、素より人間の必要に適應して進化するものであるとした。

此の様な進化論的思想が、プラグマチズムの如きものゝ發生に對して大なる素因をなしたものであることは、素より當然であると言はなければならぬ。

夫れから主知主義對主情意主義に就て見るに、謂ふところの絶體主義が倒れたと同時に、主知主義もまた其の論據を危うくされて了つた、ところで之れを心的發生の順序からして見るにしても、知識が發生されるのは後で、情意が先づ最初に發生されるのである、だから言ふまでもなく情意作用は一次的のものであり、知識作用は二次的のものでなくてはならない。

之れを生活の上に見ても、實際其の中心となるところのものは情意生活である、而して知識であるとか、理論であるとかいふやうなものは、此の中心生活、言葉を換へて言へば實生活を完全にし、夫れに意義と價值とを與へる道具であると思なければならぬのだ。

此の見地からしていふと、謂ふところの眞理であるとか、または實在であるとかいふやうなものは、詮ずるところ實生活の方便として、其所に相對的の價值があるものとされるのである。

故に其れ等としては、夫れ自身に絶對の價值などはないと説かれるのであ

るが、此のやうな心理的考察は、またプラグマチズムの出發に對して、主要なる思想的基本素因を齎らしたものであつた。

如上の解釋を以て、謂ふところのプラグマチズムなるものゝ發生的培養根基は明かにせられたのであるが、さて各方面からして刺戟され研究され促進された近代思潮は、茲に其の當然の歸結を見て、謂ふところの實用主義が發展されたが、此の派に屬するものゝ言ふところによると、其の新らたなる主義の標榜には、一つの理義が示されるのである。

則ち其の一つは、實行(則ち實行的の行爲)は人生としての本義であると説くもので、言ふまでもなく其の根柢を主意論に有するものである、之れによると、知識作用であるとか、冥想であるとか、理論であるとかいふやうなもの、つまるところは實行其のものを完全ならしめ遂行せしむる手段であり方法であつて、之れを以て直ちに實生活の本質であるとは考へることが出来ないといふのである。

で此の様な思想こそは、全く彼の英國に於ける、功利主義人生觀の進歩したものと見るべきものである。

夫れからもう一つのもは、前に言つた如くに、實行なるものを人生の本質であるとするところから、哲學なるものゝ使命は、要するに實際的經驗其のものゝ整理といふことに存して居て、決して純粹な理論の問題や、乃至は空漠たる實在問題の如きものではないといふことを、何所までも主張するものであるのだが、併し吾々を以て見ると、從來の觀念論であるとか、實在問題であるとかいふやうなものも、何も全然無意識のものであるとして、一も二もなく之れを排斥して了ふのではない、夫れ等とても素より論究の價値もあり、考想の餘地も存せられて居るが、要するに夫れ等は謂ふところの第二義の問題であらねばならぬ。

則ち喫緊なる第一義的問題としては、必ずや實際經驗其のものとしての統一組織でなくてはならぬといふにある。

で茲にいふ經驗なるものは、實行上の事實である、カントを始めとして、従来の哲學者は、みな經驗といふことを知識上の事實として居るが、今は夫れとは反對に、實行上の事實と見るのである（一種の知行合一説とも言へよう）

記傳の傳ふるところに據ると、ジエームスは神學者としてのヘンリー・ジエームスの長男として生れたが、其の父はスエーデンボルクの學徒であつたところから、先づ其れを通じて神祕思想の影響を受けたが、後に其の少年時代を歐羅巴に於て過ごしたので、また英佛の思想に感化されたとのことである、彼れは謂ふところの多學多能者であつて、繪畫、化學、解剖學、生理學、比較動物學などの數多き科學を修め、米國に於ての實驗心理の開祖家とまで言はれるものであつたが、其の哲學に心を傾けたのは、三十七八歳頃であつたと言はれる。

ところでジエームスの哲學の中心思想となつて居るものは、また一つの認

識問題其のものである。

併しながら夫れとても、彼れのものにあつては、認識する主觀、個性的自我、意識に關する問題といふのが、其の主要なるものとなつて居る。

で彼れは先づ意識なるものを言つて、其所に意識の流れといふことを言つて居る、意識——個性的自我なるものは、諸々の經驗の内容の背後に立ち、そして其の内容を支持して居るところの本體であるといふことは、最も普通に考へられて居るものであるが、夫れは決して其の様なものではない、此の意識——個性的自我なるものは、吾々の身體をば中心として統一されたところの、種々の經驗的内容の一集團であつて、其の實質上には、別に之れといふ特別な本性などは具有されて居ないものである。

ところが何うしても其所に、或る何かの纏められたものがあるやうに思惟されるといふのが、則ち意識の流れである。

之れは情意活動が、諸々の經驗をば統一し結合して、間斷なく始終發展し

つゝ進み行くところの流れであると説いて居るのである。
此の點に於ては、一寸ベルグソンの生命の流れといふのに似て居るところがある。

けれどもベルグソンの生命の流れ、則ち純粹持續の經驗といふのは、普通の時間と空間とを超越した形而上的のものであるが、ジエームスは之れに反して、全く具體的な時間と空間との間に流れ行くところのものである。

ところで此の意識の作用は何うであるかといふに、意識なるものは單に難多なるところの外界の諸々の經驗（有りのまゝの）をば、決してたゞ無闇に、差別もなく一切平等的に採納するものではないのである。

則ち生命の本流をなして居るところの情意活動によつて、多くのいろ／＼な感覺の中から、自分に對して最も面白味を覺えるもの、そして夫れが充分自己に適當されたものだけを取り出して、さて其れを認識するのであるから、實際に之れは自發的のものである。

だから吾々として、事物を認識するのは、たゞ情意活動によつて、利害の上から選擇し取り出された物だけであつて、たとひ如何にしようとも、客觀界をば其のまゝに認識するといふことは出来ないのである。

ところでまた夫れでは、情意活動を離れては何うかといふことになるが、之れとても情意活動を離れて認識するといふことは何うしても出来るものではない。

茲に其の一例を擧げて見るならば、先づ此所に情意の利害に關係を有つて居るところの、多くの事實があると假定する、而して此の物等は、尙ほ未だ何等の統一された認識に達して居ないものであるとするのである。

扱て此のやうな場合に當つて、吾々は此れ等の事實をば、果して何うして統一して夫れを認識するのであらうか、之れが實に面白い問題でなくてはならない。

ところでいよ／＼夫れを認識することになると、此れ等の事實に對して、

別に其の實相といふことなどには頓着したり關係したりすることがなく、つまり情意夫れ自身の利益になるやうに、そしてまた夫れに便利であるやうに統一してから認識するのである。

取りも直さず之れは、見やうで取り、思ひやうで取るもので、此の關係からして見ても、吾々の認識作用なるものは、全く情意生活に隨伴されたものであることが知り得らるゝであらう。

そしてまた利害關係の上からして、有らゆる一切の觀念や概念やが構成されるものであるといふことも解することが出来るのである。

で此のやうなものが、謂ふところの普通の知識と名づけられて居るものと見做すべきものであると説いて居るのである。

そこでまた、此の普通に呼び做されるところの知識の目的は何か、之れに對してジエームスは、夫れは知覺の代用をして、吾々の行動を助け、斯くして利益を與ふるところのものであると解説して居る。

夫れから實際として吾々は、觀念や概念の力によつて、複雑なる經驗をば、最も簡單なるものに處理し、而してまた夫れをいろ／＼に統一し組織立て、有らゆる一切の學問的知識を造り出し、以て生活の利益を圖つて居る、そして既に得た經驗其のものを改造して、想像力を其所に動作せしめ、斯くして吾々の實生活に適應したる、或る理想を畫して、夫れに向つて吾々の生活を指導し、向上し發展せしめて居る。

併しながらまた、此れ等の觀念なるもの、概念なるもの、理想なるもの、學問なるものとしても、其れは夫れ自身に於て絶對の價值を保有して居るものではなく、つまりは實際としての經驗に現はれたところの効果、則ち價值其のものによつて決定さるべきものであるとする。

で如上の價值としては、其れが其の量に於て、いよ／＼多ければいよ／＼多いほど、夫れは眞理に近づき實在に近づくものであるとされるが、之れで謂ふところの眞理や、價值や、實在やの問題は如法に調和されて居るのであ

つて、此れ等がブラグマチズムに於ける一般的信條であるのだが、彼れは此の立脚地からして、宗教上にも其の解説を試みたのである。

第十七章 ニイチエの哲學

其の藝術觀……哲學的人生觀……懷疑的精神……永遠論理說……超人の哲學……
ツアラツストラ……自我の肯定

フリードリッヒ・ニイチエは、千八百四十四年を以て獨逸國サクソニーのレツケンと稱する町に生れた。

彼れの主として思想的感化を受けたものは、シヨールペンハウエルとワグネルの兩者であつたが、彼れ始めてシヨールペンハウエルの著書「意志と觀念との世界」を見たときに、非常に夫れを喜んで、十四日間ブツ通しに夫れを手にして離さなかつたと傳へられて居る。

則ち彼れは此の一書からして、彼れ自身の哲學に向つて、其の新らしい地盤を得られたのであつた。

夫れからもう一人のワグネルといふのは有名な老年音樂家であつたが、其

のもの、精妙なる一曲の演奏が、ニイチエの心に甚深なる感銘を與へてから、彼れの思想の上に、燃ゆるが如き天才の火光が閃めき出されたのであつた。

則ち彼れは「悲劇の出生」の著に於て、希臘精神を論じたが、夫れには美の神アポロを以て、快活であり且つ樂天的である希臘人と其の思想の表徴となし、他の一方には酒の神デオニスを以て、夫れに對する反對の表徴となし、扱てアポロによつて此の苦の世界を美化するのが現象の世界であつて、デオニスの求めて飽くところなき努力をば、意思の世界であるとしたが、之れ等は明かにシヨールペンハウエルの哲學に基くところのものであつた、ところでまた此のデオニスの思想の藝術化されたものが音樂であると思つたところは、之れは疑ひもなくワグネルから受けた影響である。

併しニイチエに於ては、然かく意志の世界を認容したのであつたが、而も其の謂ふところの苦の世界に立つて、毫も惡びれることなき戦ひを挑み、斯くして何所までも力強く戦ふところに、美と力とが生ずるのであると主張す

る點に於て、彼れの思想は厭世的のものでなく、積極的意志を肯定して居ることが知らるゝのである。

隔世的未見のシヨールペンハウエルに對しては、大なる崇敬を持ち、現在の老音樂家ワグネルに對しては、憧憬的交遊を續けて居たニイチエも、其の思想の進展するに連れて、漸く兩者に慚らぬ節が生じて來た。

則ちシヨールペンハウエルに對しては、其の餘りに消極的な、そしてまた餘りに厭世的な思想に不滿なる心を起し、現在の交友ワグネルに對しては、開が餘りに自己の才能に自負する結果、遂に其の天分を忘れて政治社界にまで乗り出したことを不快として、茲にニイチエの心は、次第／＼に此の兩者から隔て離されて了つたのであつた。

ところが此の時に至つて、彼れの疾病はますます其の強度を加へて來た（此の疾病といふのは、彼れが普佛戰爭時代に、一個の從卒として勤務中、服藥の用量を誤つたために、強度の神經衰弱に罹つたのであつたが、夫れからし

て後彼れは、終生此の疾病のために悩まされたのであつた。そして其陰悪の度が加はつて行くに連れて。彼れはますます雄々しき精神状態を振起したのである。

之れが尋常一般の人間であるとしたら、其の不治的疾患に悲觀し、さらだに一たびビショールペンハウエルの思想に共鳴した頭腦は、一層不安と危惧と悲觀とに悶えるのであらうが、道がに天才と呼ばれるだけの彼れは、毫も其の疾病などに屈しないのであつた。

勿論彼れとしては自身に非常な悩みを有つて居たに相違ないが、面も彈力に富んだ意志は、決して夫れに屈せぬのであつた。

そしてニイチエは、嘗に其の疾病と痛苦とに屈しないばかりでなく、其の病勢の進むにつれて、其の頭腦は一層鋭くなり、夫れと同時に其の筆力もますます冴えて来て、千八百八十二年といふに、終に「歎ばしき科學」を公けにしたが、此の著に於て彼れは夫れまで有つて居た藝術的的人生觀を捨て、

科學的的人生觀に進み入つたのであつた、そして謂ふところの實在の進化なるものを以て律動的のものであると考へ、何でも一度起らせられた事は、其れから以後も同じ方法で繰返されるものであると言つて、彼の永遠輪廻説の仄めきを見せたのであつた。

而してニイチエは、一面に懷疑的精神を有して居て、开が大なる反感を抱いて居る従來の宗教道德に向つて猛烈なる非難と攻撃を試みたのである、で彼れは其の詩才に於て示せるが如くに、其の性質は一時ロオマンチックに傾かされて居たから、其の始めに於ては勿論藝術的に人生を視て居た、が靈性なる彼れの頭腦には、科學に對しても素より多大なる趣味を有つて居たところから、前に言つた如く、終に其の藝術的的人生觀から科學的的人生觀に進み入つたのであつた。

其のやうに彼れは、飄然として空漠的思想から脱し、漸く實證的思想に移さるゝと共に、やがて進化論の影響が實現されて、茲に謂ふところの超人の

哲學が打ち立てられたのである。

ところで此の超人の哲學なるものは、如何にして生れ出でたのであるかといふに、夫れは全く、生き甲斐ある生活を送るといふ思想から胚胎されたものであつた。

で此の生き甲斐ある生活を送るといふのは、前にも一寸言つた彼れの永遠輪廻説の根本義なのである。

則ち先づ此の根本思想を明かにするがために、一つ其の永遠輪廻説といふものを掲げることしよう。

永遠輪廻とは如何なるものかといふに、夫れは此の世界としての、有らゆる一切の現象は、無限の永遠に廻り／＼つて、再び何れかの時に再び現はれ出づるといふことで、此の思想を説いたのが謂ふところの永遠輪廻説である。そこでニイチエの説くところでは、此の宇宙を構成するところの力の總和は、素より一定不變のものでなくてはならない。

ところで吾々が認識するやうな種々の現象の起るといふのは、畢竟其の宇宙を構成するところの力の元素たるものが、或は結び合ふか、或は相互に衝突する結果に外ならない。

して見ると無窮無限の時間の間には、一度現はれたと同じ現象が、矢張り同じやうな方法で、而かも必然的に繰返され再現されるものでなくてはならない。

そこで之れを人間の生命の上に見ても、また同じことでなくてはならない。人間なるものは、丁度砂時計の砂のやうなものである、夫れは一度漏斗の口からして滾されたところの砂が、其のまゝに筒の中へ盛り返されて、新しくして些かの間断もなく、同じ事を繰返すのである。

故に人生には、何も新らしい事は起り得るものではない、畢竟するに今送つて居る生活をば、永遠に反覆するといふのに過ぎないのである、故に人間は其の死の瞬間に於て、之れが人生であつたか、よしさらば再びと希望する

やうな、意識があり生甲斐がある生活を營まなければならぬ、何となれば人生は永遠に繰返され、また永遠に運命づけらるゝのであるからといふのである。

如上が謂ふところの永遠輪廻の説であるが、之れに據るとニイチエは、宗教家が説くやうな、天國であるとか地獄であるとか言つたやうなものは認めない。

基督教などでは、現世で忍従修苦の生を送り、斯くして神の心に適合したならば、死して後天國へ行くのであると説くが、ニイチエは決して夫れを認容しない。

而してニイチエの考へるところでは、人生の再現にあつても、矢張り同じやうな忍従や修苦に甘んじなくてはならない、現世で苦しんだものは、二度でも三度でも、乃至は永遠無窮に、其の苦しみを繰返すべきものであつて、其所には天國といふものも、極樂といふものもないのである。

故に人間は、現世に於て生き甲斐のある生活を送るべきものであるといふに歸着さるゝのである。

で此の永遠輪廻説が、ニイチエの胸に湧き出でた由來は何うかといふに、夫れは千八百八十一年の夏のことであつた。

ニイチエは其の病軀を養はんがために、山水明媚なる瑞西の地に暑を避けシルヌ・マリヤの高原に自然を友として居た、勿論此の間とても、彼れは間斷なき思索に耽つて居たのであつたが、或日のことシルヴァアラナの湖水に赴く途中で、何物かの感想が忽として惱み疲れて居た彼れの胸に湧いたが、夫れと同時に彼れは自ら瘠軀を抱いて歡喜の叫びを發したのであつたが、此の時の彼れの感想は、其の自傳的記録に、「人間と時間との他の側六千フィート、余は其の日森を横切つて、シルヴァアラナの湖水に行つた、余はスルレイから遠からぬ巨大な尖塔狀に積み上げられた岩の處で止まつた、其處で此の思想が余に湧いたのである」と記されて居る。

實際から言ふと、此の永遠輪廻などいふ説は、何もニイチエの獨創のものとは言へない、則ち物の再現などいふことは、古代希臘のピタゴラス學徒やストア學徒などの間にも唱へられたことで、東洋印度などにも此のやうなことが言はれて居るが、要するにニイチエとしての此のやうな思想は、疑ひもなく古代希臘の研究によつて抱懐さるゝに至つたものに違ひない。

扱てニイチエの本領としての超人の哲學は何うであらう、で先づ第一に解決しなければならぬのは、謂ふところの超人の意義である、ところで茲に言はれる超人なるものは、正しく文字通りに、人間を超越したものと云ふことである。

則ち言葉を換へて言へば、人間は猿よりは優つて居る如くに、超人は人間よりは優つて居るのである。

ところで之れを進化論の上から見ると、人間は最初からして、今日見るが如き形體を具へて居るものではなかつた、下等の動物から漸次に進化して行

つて、而して猿から進化したものが人間であると説かれて居る。

で其の人間は、今のところあらゆる動物の最高位にされて居るが、果して然らば動物の進化なるものは、人間に於て其の終局に達したものであらうかといふに、強ち然うとも斷定する譯には行かない、つまり人間なるものも、法の如くに進化の中間にあるもので、要するところは、更によき人間を完成する過程にあるものと考へられるのであるが、則ち其の更によき人間といふのが、取りも直さず超人であるのだ。

そこで謂ふところの超人の哲學は、何んな工合にして説かれたかといふに、夫れは一つの假託によつて説かれたのである。

則ちニイチエは、ツアラッストラといふ一個の人物を造り、自分の超人的理想を其のツアラッストラなる人物の言行に假託して説示するのであつた。

そこで件のツアラッストラは、高い山の上にある大きな洞窟へ、民主制の誤解と迫害との下に惱んで居る比較的高級の人達を集めて、超人の道徳を説

き聞かせたのであつた。

而して夫れは、「汝等は虫から人間に進んだのだ、汝等の中の多くは猶虫である、汝等は嘗て猿であつた、聽け我は汝等に超人を教へよう」と言つたやうな調子であつた。

ツアラツストラは、肉體と本能とを重んずることを教へた、而してまた主として精神を重んずることをも教へたのである。

又夫れと同時に、精神ばかりを重んじて、本能を蔑如にする從來の宗教を攻撃するのであつた、自然なるものは、有らゆる一切が總て無價値のものである。

ところで此の無價値なものに價値を與へるものが人間其のものである、之れを例して言ふならば、草は鹿に對しては價値がある、何であるかといへば、夫れが鹿としては尊い食物であるからだ。

ところで草に此のやうな價値があるからといつて、夫れは人間や獅子に向

つては決して役に立つものではない、鹿は夫れを食物にするから、鹿に對しては價値があつても、獅子や人間は夫れを食物にはせぬから、草は獅子や人間には價値があるとは言へない。

則ち此の通りに、たとひ動物に價値があるからといつて、決して人間にも價値があるとする譯には行かないのである。

此の道理からして、或人の善は必ずしも他の人の善ではない、また或一國の民の善は、必ずしも他の一國の民の善とは言へぬし、同じく或る時代の善が、決して他の時代の善ではない。

して見ると善であるとか惡であるとかいふことや、眞であるとか偽であるとかいふことなどは、素より不定不變のものではないのである、夫れであるのに、爾ふところの宗教は、何時も同じく依然として、古い價値表に準據して居るのであるが、之れこそ實に人間の進化を妨げるものであると説くのであつた。

夫れから超人の哲學なるものは、要するに強者の哲學であると共に、また意志の哲學といふべきものである。

で超人とならうとするものは、先づ第一に何よりも、力強きものであらねばならぬ、而して其の意志を飽くまでも鞏固に持たなければならぬ、そして愛であるとか、憐れみであるとか言つたやうな感情をば、一切心の底からして捨て去つて了はなければならぬ。

此の如くにしなければ、決して超人に相應なる、正しい價值表を創作することは出來ないのだ。

そして若しも弱い者があつて、夫れが倒れかゝつて居るならば、構はない押し倒して遣るがよろしい。

また今や亡びかゝつて居る者があつたら、どし／＼亡びさせて了ふが、そしてたゞ強者と善人のみが、超人を生み出すものであると説き教へるのであつたが、斯うした説き方に向つては、無論何人といへども冷酷なる語を加

へずには居られぬところであらう。

ところで彼れは之れに就いて、更に一步を進めて教へるのである。

冷酷であるとか、夫れこそ正しく人間の取るべき道である、冷酷を愛するといふことは、つまり超人を愛するからである。

冷酷何の不可あらん、凡てのものに對して冷酷であると同時に、自身自身に對しても冷酷でなくてはならない、見よ基督の教は、其れ自身が説いた愛のために倒れたではないか、畢竟するところ勞苦なるものは、偉大其のものゝ源泉でなくてはならないと言つて居る。

夫れからまたニイチエは、人生は常に其れ自身を超越するところの或者でなくてはならないと言ひ、其の謂ふところの超越の一面は、つまり他を征服する事なのであるとした。

そして征服は戦ひであるから、随つて超人の道德といふものは、戦ひの道德となるものであると説いて居るし、彼のツアラッストラは、飽くまで戦ひ

を讀め稱へ、戦ひといふことのみが、よく人間に進歩を齎らすものであつて、また夫れのみが、よく人間を超人に近づかしめ得るのであると言つて、口を極めて戦へ戦へと教へるのである。

之れを要するに、ニイチエの中心思想となるものは、全く自我の肯定であつた。

一體此の自我の説き方については、從來幾多の様式があつた、則ちデカルトは先づ自我なるものを確認した、夫れからスピノーザは、自我と他との關係を説いて、他の中に自我の理由を認めた。

次にはカントが、自我其れ自身の眞正の價値を明かにしたが、其の後に現はれたフイヒテは、自我と他との關係を認めて、自我なるものゝ作用からして之れを説明しようとした、そこで此の自我が外に向つて新らしい價値を有し得るといふことを説かうと試みたのがニイチエである。

以前に於てフイヒテは、意的自我ともいふべきものを説いた、ところで此

の意的自我の内容は何であるかといふと、之れは疑ひもなく舊來の道德其のものである、則ち舊來の道德——言葉を換へて言へば昔しからあつた價値をば、其のまゝ受取つたのであるから、之れに對して新らしい自我を立てようとするには、何うしても其の價値をば變更しなければならぬ、詳しく言へば、今迄の道德の内容を變へて行くのが必要である。

そして自我に區別を設けて、或る特別な優れた自我を立てることゝ、あり來りの價値を變更することゝの二つの事柄が生じて來たが、此の二つの事柄を説き明かしたのがニイチエであつた。

自我問題についてのニイチエの解釋は、確かに或る強い光輝を有つものでなくてはならない。

ツアラウストラの如是説は、最も強くニイチエの胸中に浮び上つたもので、彼れに於ける自我の天資的結晶物に外ならぬのである。

此の超人則ち優種の自我に關する概念は、近世の初頭からして、次第く

に確立して來た自我が、茲に至つて明かに其の意味を附せられたのであつて、夫れが將來猶ほ取捨し改變せらるべき餘地があるにもせよ、今日に於て之れを一哲學者の單なる學說とのみ見過す譯には行かぬのである。況んや價值を本位とするところの現代の哲學的思想は、何れの點に於てもニイチエの所説と密接さるべきものであらう。

第十八章 ゲーテの哲理

多角的人物……進化論の開祖……沈思よりも實行……真理觀……強き意志……
の解放……平和……現の夢……當任の建設

巨人ゲーテの生れたのは千七百七十九年十二月二十九日であつた、そして彼れが人生第一の行路として、其の呱呱の聲を擧げたのは、北部獨逸のエルベ河附近のオツテルンドルフである。

史傳家の傳ふるところによれば、ゲーテの父も詩人であり、且つ有名なる文献學者であるといふから、ゲーテとしての思想は、實に父祖傳來のものと言はなければならぬのである。

ゲーテは其の思想的巨人として、不磨の盛名を萬古に垂れて居るのは勿論であるが、また彼れは近代稀れに見るところの多角的人物であつたと言はれる。

則ち其れの詩に於て、夫れの脚本に於て、夫れの創作に於て、夫れの批評に於て、夫れの劇に於て、夫れの繪畫に於て、夫れの彫刻に於て、夫れの建築に於て、夫れの科學に於て、彼れは實に大なるものとして生じたのであつた。

其の科學に於ても、彼れは植物學、礦物學、光學、解剖學、骨學、地質學などは、みな其の分内のものであつて、顎骨に關する發見と、生態學上の創見とは、夫れのみを以てしても彼れの名聲を不朽にするものであると言へば、其の考察と努力の及んだ點は、實に驚くべきものがある。

殊に進化論の如きも、實はゲーテを以て其の祖述者であると言すべきものだと言つたヘッケルの言を思ひ合せると、彼れの筆力の及んだところは、双手の指を列ぬるも足らぬものがあらう。

ゲーテの閱歷を記すといふことは、本篇の主とするところではない、巨大なる思想家として、稀有なる藝術家として、巨人たる彼れを見るのが、其の

目的とするところであるから、今は彼れの思想的斷片をば、其の語録によつて窺ひ採り、以て聊かにても其れに共鳴しようとするものゝために資することにするのである。

「如何にせば自己なるものが知らるゝであらうか、沈思か然らず、依るべきところのものはたゞ躬行のみである、」之れは實に人間としての取るべき道を道破したものと云はなければならぬ。

徒らに冥想したればとて、空しく沈思したればとて、そしてたとひ何物かが得られたればとて、开を躬行することなしに夫れが何にならう、要するところのものは實行であつて、決して空想其のものではない、之れが實に彼れの思想の第一義であると言へよう。

「真理は必ずしも具象又は體現するには及ばない、精靈の如く周圍に浮在して、和諧を生ずれば足りるのである、梵鐘の響きの如く、沈痛に、漏々と、大空に響けば足りるのだ、」大なる哲人の考ふるところでは、全く斯うしたも

のでなくてはならない。

之れ等が全く詩聖としてのゲーテの本領の存するところで、眞理其のものを觀じて、直に之れを詩趣化するところに、より大なる感想が見られるのである。

和諧夫れは有らゆる哲學と科學の要求的でなくてはならない、其の和諧を得るといふところに、詩人の満足があり、哲人の満足がある。

「空漠たる觀念をもてる者と、自負心の弱い者とは、必ず恐るべき失敗を演出するものである。」

之れもまたゲーテとしての強烈なる意志を語るものでなくてはならない、歴史家のいふところによれば、ゲーテは極めて圓滿な性格を有して居るものであつたとの事であるが、而も其の精神の奥底には、尋常藝術家の企て及ぶことの出来ぬ強い意志が保たれて居たのである。

自負心が弱いといふことは、自我の觀念に足らぬところがあるのをいふの

で、此の邊のところは、やゝニイチエの夫れに髣髴したところがある、ニイチエも後には藝術觀から出て、科學觀に入つたが、ゲーテが其の多くを科學的に有するところも、また近似するところのものと言へる。

夫れからまたゲーテは「自制の力を與へないで、靈を解放することは、一つの利もなくして、百の害がある」と言つて居る。

之れなども充分に單利的な彼れの洞察が見られるものである、實際自由制といふよりは、寧ろ放逸性を有するところの靈、則ち赤裸の精神を無條件に解放するといふことは、危険此上もないことではなくてはならない、が本來自由を要求し、靜なくとも之れに由つて生きようとする靈其のものをば、牽制束縛するといふことも勿論出來ない、則ち其所には自發的の制約、則ち他からして加へられるものでない一つの自制力の下に解放する必要があるのだ、風の如くに生じ、風の如くに行き、また風の如くに滅するといふ種々雜多な意思の觸起される今日、ゲーテの此の格言は、眞に頂門の一針たるべきもの

であらう。

文

「平和の因子となるべき力が二つある。一つは正義の感で、一つは合宜の感である」之れゲーテの平和觀と見てよろしい。

ところで茲に言ふ正義なるものは、何も必ずしも舊來の舊道徳に囚はれたものとして解釋するには及ばない、我れに於て正しと感したるものがやがて夫れで、夫れ等の思想の合致したところに何時でも意義ある平和が要望されるのである。

夫れからまたゲーテは、人を理解するといふことについて「處世上より言へば、強ひて人を理解する必要はない、其の時其の場に居合はせたる者より、伶俐に立廻りさへすれば事が足りる、縁日商人、香具師などが、其の好き例である」と言つたのである。

成程何れの時代でも、斯うした心理作用は同じもので、何も今に於て異つたところはない、其の時、其の場、其の人によつて、如才なく立廻るところ

に、存外旨い効果が得られるといふのは、今日に於けるユーボー式心理をも道破したかの觀があるではないか。

ゲーテは道がに詩人である、則ち彼れは眞面目な意識の上に立つて、一つの矛盾心理を同化的に解釋して居る、則ち夫れは「自然の要求として、吾等は時々覺めながら夢見ねばならぬ、煙草を喫し、ブランドーを飲み、阿片に耽つて、而して快樂を覺えるのは、此處の理である」玩味して來ると平易の底に沈痛の氣が靡然として浮動するのを感じるのである。

自然の要求、吾々は何うして其所に出る、實際此の世の中は、覺めつゝ夢見ねばならぬほど苦痛なものであり、味氣ないものである、世の中が果して理法であつたならば、煙草も無くもがな、ブランドーも無くもがな、阿片も無くもがなである、而も之れを要する世界としては、デカダンならずとも何人か之れを拒み得るものがあらう。

また彼れは「思想を恐るゝものは、遂に何等の觀念をも作らずに終るので

あると言つて居る。

洵や思想を作るものは、よく有らゆる思想に觸れなくてはならない、謂ふところの過激派の思想が悪いからと言つても、之れから完全に免れ去らうとするには、何うしても親しく過激派の思想に觸れなくてはならないのである。然るに思想が恐ろしいからと言つて、無關矢鏢に其れに觸れることを回避するやうなことでは、逆も何等の新らしい觀念や善美な觀念を造り得るものではない。

之れなどはゲーテとしての包容力の大きるところを示すもので、今日に於ける政治家たり、爲政者たり、社會改良家たるものゝ千讀萬誦すべきものであらう。

「自己對自我及び外界の關係を自覺したものは、直ちに之れを稱して真理といふ、故に何人にも、其の人の真理があるのだ、が併し真理夫れ自身は、常に同一であつて渝るものではない」といひ「箇は常に普遍に従ふべく、普遍

はまた常に箇に順應すべきものである」と言ふところに見ても、ゲーテが一面に大なる哲理的頭腦を有して居たものであることが知れよう、詩人として立ち、科擧者として立ちつゝあつた彼れも、優に大なる哲學家として立つべき資格は具備されて居たのである。

夫れからまた「活動の人は必ず良心が鈍い、止まつて内省するものでなくは、良心の鋭敏は望まれない」と言つて居る。

併し内省は必ずしも瞑想を要するものでないが、社會が動的になればなるほど、人々の良心が鈍るといふ事實に見れば、之れなども透徹した觀察であると言はなければならぬ、則ち人は或場合詩人の態度を學んで、動中靜を得る工夫をしなければならぬのだ。

單に活動々々と騒ぎ廻り、活動萬能膏の效能書を高唱する今の時代には、ゲーテの此の警語こそ、真に一味の清涼劑でなくてはならない。

終りに一つゲーテの無常觀といふものを掲げよう、則ち彼れは「徒らに人

生の無常を歎じ、濫りに現世の希望の空虚を悲しんで居る者は、實に憫れである、吾等が此世に生れ出でたのは、唯々斯の無常を變じて、常住となさんがためである、而して、無常、常住の二つの境地が見得るならば、これは容易に成就し得るのである」と言つたのである、吾々が此の世の中に生れ出でた目的が、無常を變じて常住とするにあるといふところに、大なる人生的意義が語られて居るではないか、苦の世界であればとて、夫れに屈するものかと言つて聞つたのはニイチエであつたが、ゲーテは寧ろ其の苦の世界であり、無常迅速である世界を回轉して、常住不斷の大生命を打ち建てようとするところに、彼れの大精神は見渡すことが出来るではないか、徒らに苦惱したり、徒らに悲觀したり、そしてまた徒らに失望落膽したりするやうなものでは、迎も適切なる生存者となつて、意義ある人生を完全に過了することは出来ぬものである、がゲーテとしては、眞面目の上に其の無常を常住とするところに、譯もない樂天論者から立ち離れた、一つの人生的眞理を握んで居ること

が分るのである。

此の點に於て、彼れはたとひ秩序ある具體的の哲學を有して居ないにしろ、確かに偉大なる思想家であり、驚くべき哲學家たるべきものである。

第十九章 ルードルフ・オイケンの哲學

新理想主義……精神生活の哲學……人生の革新……自律的生活……人間向上の三
階段……創造の哲學……宗教的色彩

ルードルフ・オイケンの生れたのは、千八百四十六年一月五日であつた、そして其の生地は、北獨逸の東フレジアなるアウリツヒと註されて居る。

オイケンの哲學は、打ち任せて新理想主義と呼ばれるものである、で此の名稱の由來は何んなものであるか、換言すれば何が故に新理想主義と名付けられるのであらうか、之れは彼れの哲學を研究する上に於て、先づ第一に釋明して懸らなければならぬものである。

ところで此の問題を解決するには、また當然謂ふところの理想主義なるものを釋明するを要するのである。

そこで理想主義なるものを見るに、此の語は謂ふところの現實主義に對應

して唱へらるゝものである。

そして夫れは、十九世紀の現實主義、言ひ換へれば科學的主知主義に對する反動として、其の思想たり主義たるものが提唱せらるゝに至つたのである、で此の主義としての要約とさるべきものは、よく人間の生命の根本に復つて、夫れをして積極的發展進歩を促進せよとする一つの理想主義なのであつて、之れに對する提唱者としては、オイケンが其の首唱者であり、最重の權威者であると推稱さるゝところのものである。

其の人の思想を知るには、其の人の周圍を知らなければならぬ、而して其の思想の發達變遷を知るには、また由つて其の培養され助長された徑路を詳かにする必要がある。

則ち此の意味に於て、吾々は先づ彼れの少年時代を回顧しなければならぬ、史傳家の傳ふるところによると、オイケンの母なりし人は、オイケンが幼少時代からして、寡婦としてよくオイケンを傳育し、其が慈愛の手一つをもて

其の最愛の一子を導き訓へたのであつた。

で此の母といふのは、元來が自由主義の牧師の家の出であつたので、頗る聰明でもあり同情にも富んで、且つ宗教的經驗にも富んで居て、オイケンを養育する上には、出來得るだけの自由と幸福とを與へようと、艱難と辛苦とを排してさまざまに心を砕いたものであつたが、オイケンが後に至つて、其の大なる性格を享有したのも、實に此の慈母に負ふところが多かつたと言はれる。

斯くてオイケンは、其の生地の學校に於て普通教育を受けて居る中に、彼れは更に其の精神と思想の上に、極めて重大なる影響を受けた。

で此の大なる影響をオイケンに與へたものは、ウイルヘルム・ロイタルといふ神學者であつた。

此のロイタルは、教會歴史家として知らるゝロイタルの子であつて、宗教上にてはルーラル派の保守主義に屬するし、其の哲學はクラウゼの弟子とし

て得られたものであつたが、其の當時ロイタルは同じ町に於ける高等學校の教師をして居たのであつた。

ところが此のロイタルには、頗る青年を引附ける力があつたので、少年時代のオイケンも之れに親炙して居る中に著しく其の感化を受けた。

ロイタルもオイケンの資性を見抜いたのであらう、努めて其の哲學的興味に向つて、及ぶ限り夫れを涵養し助長することに意を用ひたので、オイケンは遂に此の多大なる影響の下に、他日大哲學者たるべき基礎が築き上げられたのであつた。

斯くの如くにしてオイケンは、既に其の少年時代からして、哲學の興味を持ち、且つ同時に宗教的問題には、一層強い興味を持つて居たのであつた。併しながら彼れとしては、其の宗教上に對する興味といつても、何も規則通りな、そして形式的な、言葉を換へて言へば専門的神學者の態度といふ意味の興味的研究ではなく、一口に宗教的問題と言つても、つまり其れとして

の哲學的方面に其の興味が有せられて居たのであつた。

則ち其の當時からして、彼れは早くも人生問題や宗教問題に其の心を潜めかけたのであつて、普通的に之れを評したならば、實に思想上の早熟兒であるとも言ふことが出来よう。

开は兎も角として、オイケンは遂に一家の哲學を成就したが、而も謂ふところの新理想主義哲學であるにしても、精神生活の哲學にしても、また彼れ自身の權化的哲學であるかの如き觀があるのは、大に注意すべき事柄でなくてはならない。

で一たび眼を轉じてオイケンを見るに、彼れの性格は實際熱烈的であり、眞摯的のものであつた。

因襲的の生活や、放縱的の生活のやうな、姑息な淺はかな形式生活などは、到底彼れの忍び得るところではなかつた。

而して彼れとしては、如何なる點に於ても、眞實である生活に生きようと

して、キチンとした眞面目な、而も些かも弛みのない自我の上に彼れ自身を置いたのであつた。

オイケンの思想を通じて、其の琴線を辿つて見ると、往々にして峻嚴なところも見られるし、悲痛なところも感ぜられる、そしてまた夫れが一種ピリツとした冷酷の鋭さにも感ぜらるゝのである。

實に彼れは自身にも冷酷であり、他の一切にも冷酷である如く見えたと相違ない。

けれども眞の事實は何うであらう、果して打ち見らるゝが如くに、彼れは冷酷であつたやうか、否、決して然うではない、彼れは實際として温情の人であつた、至情の人であつた。

斯う言つたところでは、誰れしも矛盾の感に打たれずには居なからうか、オイケンの思想にも、また其の性格にも、然かく冷酷らしい嚴しさと悲痛が見えるは、畢竟其の自己を受することも熱烈であり、他の一切の人類を受す

ることとも熱烈であり、他の一切の人類を愛することも夫れと同様に熱烈であるといふことに存するのである。

眞なるもの、美なるもの、そしてまた善なるものは、彼れの心と身とを傾けて好愛するところのものである、而して开を極度にまで好愛するところから、また必然的に、偽といふこと、醜といふこと、そしてまた悪といふことを憎悪したのは當然である。

ところで心をも傾け、身をも傾け、極度にまで眞と美と善を好愛するだけに、また偽と醜と悪とを憎悪することが、實に甚大なものがあつて、殆んど極端とも稱すべきものであつたのは、之れとても素より當然でなくてはならない。

正しく愛するがために惡むといふところに、彼れの性格や思想やは嚴肅と悲痛とが彩られ、やがて冷酷の觀をさへ附するに至つたのである。

則ち酷だしく眞美善を愛するから、また酷だしく偽醜惡を憎むので、其の

心的態度が冷酷なる裁判官となり、冷酷なる監督者とならずには居られぬのであるから、彼のニチチエが、一切のものに冷酷なれ、而して同時に我れ自身にも冷酷なれと叫んだのともまた大いに異なつたものでなくてはならぬ。

偽を惡み醜を惡み惡を憎むのは彼れの根本的性状ではあつたが、而も其弱く小なる惡や醜に對しては、また彼れは頗る大なる同情の涙を以つて居た、要するに彼れは生命の熱愛者であつて、緊張し充實した生活と色彩あり光榮ある生活に生を得ようとする要求と努力から、人生乃至宇宙の眞なる價値をば明かにしようとするところのもので、彼れの哲學は實に茲に其根柢を有するものであつた。

オイケンの所説を概括して言ふと、從來の自然主義も、主知説も、共に一つとして完全に實在なるものを説明するに足るものがない。

自然主義の方にあつては、常に精神界を拒否しつゝまた之れを豫想するし、主知説の方にあつては、其の論理的思惟を以てしても、經驗を公正にするこ

とは出来ない、無限を憧憬するところの精神は、吾々の中にも、また歴史の中にも示現されて居つて、個々の精神生活の本源として、彼等の獨立なる可想界、則ち普遍の精神過程を示すものである。

吾々の斯る自由と自動の精神を自己中に經驗する、之れは吾々の演繹することの出来ない公理的事實であつて、此の如きは直接に會得しなければならぬところである。

人類は其の本質からすると歴史を超越するものである、たゞ人々が不完全であつて、完全に向つて努力する間のみが、歴史上存在であるのだ、元來精神生活なることは、物的自然の一つの現象に過ぎぬものであるが、夫れでなければ、一切の本源たるべき自存の、普遍的渾一體であるかの何れかでないてはならない。

ところで若しも人生なるものが、單に自然の一つの事象に過ぎないものであるとしたならば、开は何の價值もなく、人生に於ける最尊最貴のものも、

單なる迷妄に過ぎないものとなつて、宇宙は不合理の者でなければならぬことにならう。

宗教が努力するといふことは、決して單なる人類の幸福のみを目的とするのではない、其の眞なる意義は、人間の根柢にあるところの、眞の精神生活を保有せしめようとするところに存するのである。

そして夫れは、人の精神的に賦與されたものと、其の現實の位置との矛盾により、高等の力が、心中に作用してあることを信するに至るものである。そして單なる現象其のものに拘泥されることなく、同時に眞の生活に生きようとする熱望や、愛なるもの、憧憬は、何うしても人間の心からは除き去ることが出来ない。

で人の不斷の努力、自己活動、直接そして無限に向ふところの衝動は、人間に無限力の作用がないとしたらば無論不可能でなくてはなるまい、則ち若しも超越界がなかつたならば、精神生活は破碎されて了つて、其の内的眞價

なるものは失はれて了ふことであらう。

此の意味に於て、謂ふところの觀念論的汎神論は、高等の世界を希ふところから生ずるものである。

普遍的生命は、人の歴史意識及び自然に至るまで、一切のものゝ根柢たるものである。

此の普遍的過程は、無機物からして有機物に、自然からして精神に、自然的單純なる靈魂生性に進展し、斯くして謂ふところの獨立と自己實現へ進化する、其所に世界は自らを意識するに至るものであつて、個人としての發達は、全く此の普遍的生命の内のみ可能的のものでなくてはならない。

之れが則ちオイクン哲學の人生的要諦であるのだ、ところで吾人は茲にもう一步を進めて、更に細かく夫れを觀察し研究して見よう。

オイクンの哲學が、其の特徴を人生的歴史的に有するものであることは、如上の記述によつて既に知了されたところであらう、併しながら此の人生的

であるといふことは、決してオイクンの哲學ばかりに見るところではない、近代否寧ろズツト進んだ最近に於ける哲學としては、人生的といふことが、何れもの一般特色をなして居るのである。

然るに茲にオイクンのものに對して、夫れが人生的であると言はれるのは、其が中に就ても、最も實人生に即したものの、言葉を換へて言へば最も實際的なものはオイクンのものであると言ふ意味なのである。

則ちオイクンとしては、人生に關する知識の増進といふことよりも、新たな人生の意義と價值とを究むること、換言すれば謂ふところの人生の革新といふものに向つて其の全力を傾注したのであつた。

之れを従來の哲理思想の上に見るに、冷靜なる理智的考察や學理的思辨が最も重要であり、喫緊であり、思索や手段に於ては、之れを外にしての些の餘地をも有して居ぬのであつたが、其の様に稍ともすると實生活に逆行しようとする哲學に對しては、彼れは到底一點の首肯をだに與へることが出來な

かつた、と言つて又更に科學の取つて來た道などにも勿論首肯すべくもなかつたのである。

故にオイケンとしては、自然界の事物に對しては、冷々鐵の如きものがあつた。

そして如何なる場合にも夫れ等の事物に對して些の感興をも喚び起すことがなかつたのであつた。

そして彼れは、個々の人間其のものが、淺はかな自然の一片となつて、謂ふところの他律的なる自然法によつて拘束されて居る間は、之れはたゞ人間的のもの又は小人間的のものに外ならないと言つて、極度に之れを排斥したのであつた。

そして夫れと同時に、此のやうな小人間的のものなる生活境涯から脱離して、謂ふところの自律的な精神生活の新らしい天地を開き、そして其所に眞の人生の意義と其の價値とを見出さうと企てたのであつた。

とは言へオイケンとしての此の試みは、決して空想的の人々が、同じく此の様な新天地を開拓しようとして試みたやうな無謀であり空想であるやうなものとは其の類を異にして居たのである。

則ち彼れオイケンに於ては、よく此の企圖をして完成せしめようとして、努めて無謀な空想や空理を避け、其の新天地建設に要する資料をば、過去の精神生活の歴史の中に探求し、开を巧妙に如法に綜合し取扱つて、鋭意新らしき生活の新天地を開き、以て生の究竟的擴張を企圖しようとして、則ち彼れは同時に其の力を歴史の研究に傾注したのである。

彼れに於ての此の試みは、言ふまでもなく、人生の意義と價値とに對する解答をば、哲學史上に得ようとするものであつた。

斯くして彼れは、其の攷究すべきものを假定し、茲に第一には宗教、第二には内在唯心論、第三には自然主義、第四に主知主義、第五には社會主義、第六には個人主義の六つのものを選び上げた。

之れは素より彼れの研究標目であつて、其の研究した上で、其が中から眞なる人生の意義と眞なる價值とを見出さるゝものがあつたならば、彼れは之れを以て其の哲學の究竟的根據となし、開を傳り立て、如法の哲學としやうといふ考へなのであつた。

彼れが此の六つのものを取り出して、其の他のものを顧みなかつたのは何故であらうか、たとへば從來からの重鎮をなして居たところの、懷疑論や不可知論は如何なる理由で之れを取らなかつたか、之れは決して左したる問題ではない、之れ等のものは、謂ふところの生活の意義と價值とを、最初からして肯定して居ないからであつた。

扱て彼れは兎も角も上記の六つのものを選択して取り出したる後、夫れに對しての攷究論評の基標を定めた。

第一には、生活其のものに向つて確實なる基礎を附與するもの。第二には、人類をば卑賤なる動機から開放するもの。第三には、人間の自由を可能なら

しむるものが之れなのであつた。

此の三つの條件の下に、彼れは所定の六つのものに向つて、有らん限りの批判的研究を行つたのであつたが、而も彼れの豫期するところはガラリと外れて了つて、何等満足すべきものを得るところがなかつたのである、そこで彼れは、從來の何にも失望して了つた。

此の上は自ら其の是とするとところに向つて進まなければならぬ、此の思念の上に立たされた彼れは則ち奮然として夫れ自身の精神生活の哲學なるものを高唱したのである。

此の精神生活なるものは、實にオイケン哲學の中心を成すものである、で謂ふところの精神生活とは如何なるものであるか、概して之れを言へば、開は自然生活と、物質生活とに對峙さるゝところの生活を指すのである。

で彼れは其の精神生活なるものゝ定義をば、定めて「内面的發展と自由、即ち吾人の自己超越が、特に大思想家の畢生の事業をして、我等に價值あり

裨益あらしめる所以なのである。故に個人的真理といふことは、木製の鐵(言語上の矛盾)であつて、決して夫れは真理ではない、夫れで若しも我等は、宇宙に對する何等かの内面的關係をも思考に於て得ぬものとするならば、即ち思考と廣汎なる且つ深遠なる生活とに基かぬものとするならば、哲學は其の最高の成績に於て理解されたやうな意味に於て、又た人間に實際効果を及ぼしたかのやうな意味に於ては、存在しない事になるのである」といひ、更に「我等は斯くして思考から生活の方へ向けられて來た、其の生活といふのは、己れ自らが或る全體に關係し、そして其の勢力を個々の目的に向け、そして環境の全部に對して、自ら調整する生活をいふのである」と説いて居る。

夫れから彼れは、根本的に眞在と關係せしむるが如き、世界形成的の生活が、明かに我等に現れるか何うかといふ問題を肯定して、精神生活の定義に直入した「精神生活といふのは、特に生活統計を形成することである、精神生活は、單に主觀の力を刺戟し、之れを高めるのではなく、主觀に對立する

ものゝ範圍を其處に生じて來るのである。

即ち主觀客觀の兩つの者は、其の完全なる發動に包含され、而も相互の發展を助けて居る、此の兩方面を包含することに於て、生活の内容と價值とが生じて來る。

そして此の内容と價值とは、其の内面的なることに於て、單なる人間の能力や意見に比し確かに優秀なものである」斯う彼れは言つて居る。

夫れからまた、自然生活が、或程度まで發達せる時に、精神生活が始まるのであるが、夫れかと言つて、何も兩者の間には、因果關係などは存して居ないのである。今一例を擧げて之れを言ふならば、發達の度合がまだ低い階段に於ては、人は全く自然兒の状態にある、だから其の一々の生活は、一も二もなく徹頭徹尾に自然に順應する事でなくてはならない、また人間としての夫れ等のものゝ努力なるものも、また自然的の欲求を満足せしめやうがためにはばかり使用されて居るのであつた。

併し此のやうなことは、素より永久には連続されるものではなかつた、則ち或る時代に到達して、人々己れを考ふるときに、其所に高き理想を腦中に描き出し、斯くして我れと我が心臓の鼓動を興奮させつゝ、其の描き出したものを實現させようとしての奮闘を開始するのである、之れが則ち自然生活の外に、精神生活といふ領域が現はれて來たものである。

併しながら茲に注意をしなければならぬのは、此の精神生活なるものは決して最初からして、自然生活と並び存せられて居たのでもなく、さりとしてまた自然生活から分れて出たものでもない、夫れから自然生活なるものが發達をして、夫れが精神生活に變つたものでは猶更ない、此の自然生活といふものと、精神生活といふものゝ上には、素より兩者の上に根本的の差異があるのだ。

則ち自然生活は消極的生活であり、精神生活は積極的生活であると言へる、今此の兩者に就て區別して見るならば、自然生活は無意識的のものであつて、

個々の事物は孤立して居る、そして其の間に必然の法則が流れて居て、其の結果他律的である、故に开は一般に官能的であり、野獸的でなくてはならぬ、則ち打ち任せていふと、本能的受身の生活にか過ぎぬのである。

夫れから精神生活の方は、自然生活が無意識であるに反し、之れは全く有意識である、だから理性的であつて、随つて自律的のものである、既に有意識のもので、同時に自律的であるからして、之れは全く獨立自存の絶對的存在で、随つて自由に自らの世界を開展し得るところの生活なのである。

ところで面白いことには、此の精神生活なるものは、自然に對しても人間に對しても、全く獨立されたものであるが、また同時に、夫れが人間の中に顯現するところのものであるのだ。

此の精神生活といふものを詮じて見ると、自然的普通の生活に比しては、全く別世界の生活と言つた趣きがある、古き理想主義者などが、彼岸の郷だの、ユートピア(理想郷)だの、將來の世界だのと言つて、之れを現世以上に

見做し、或る唯物學者などからは、全く空想的理想とまで冷評されたほどのものである。

ところでオイケンの新理想主義による精神生活となると、決して其様な空想的不可及のものではなく、何所までも夫れを實際的真面目なる境地に求め、开を現實的のものとして、現世の人間の生活の中に打ち建てようとするものであつた、之れ等が取りも直さず、新理想主義と唱へられる所以のものでなくてはならない。

夫れからオイケンは、單なる人間其のものを以て、一つの過渡的の點にあるものとした、則ち自然生活から開放されて、精神生活に入る道程に、宇宙生活の自己展開なるものが存せられる、そして人間なるものは、正に此の自然生活から精神生活へ移り行く過渡の點にあるもので、兩者の連鎖たるべきものであると言ふのである。

夫れで人間は、其の本來の面目に於て、自然生活の檻の中に他律的の宇宙

的人生的支配を受くるのであるが、而も其の一面に於ては、謂ふところの自然的他律的生活から脱しようとする超越性があつて、如何にかして動物の一員としての生活から離れ距り、本能なるものや慾望なるもの、而してまた制限を有するものから超脱しようとする聖火が焰々と燃え上らされるのである、そして夫れと同時に、自然生活と精神生活の永遠の戦ひがあるので、之れが人間たるもの、今の状態と言へるのである。

然るに茲に精神生活なるものが、一たび吾々の上に現はれたとなると、果して如何なる關係が生じて來るのであらう、則ち夫れがやがて内部からして吾々を束縛し、警醒せしめ、遂に自然的生活を離れて、始めて精神其ものの支配下に立ち、よく自律的の生活が開始さるゝのである。

之れに由つて是れを觀れば、人類進化の過程なるものは、自然からして精神へ、他律からして自律へと進んで來たものであるといふ關係が、分明に了解せらるゝものである。

自然の束縛を脱し得たとしても、更にまた精神の束縛を受くるといふことに就ては、大なる注意を以て其の意義を了解しなければならぬ、從來に見られた多くの改革や新提唱の如きものは、往々にして前門に虎を拒ぎ、後門に狼を前むるが如きものであつたが、茲に言ふ精神其のものが、内部から吾を束縛するといふのは、決して其の様なものではない、則ちオイケンの言ふところによると、人間なるものゝ氣儘を超越した法則が、個人の生活にも將た社會の生活にも認められ、高唱せらるゝことを要する、若し然うでないとしたならば、権利の觀念や義務の觀念は、到底確固とした内部の根柢を得ることが出来ないものであらう。

而して此の法則は、他人から與へらるゝところのものではなくて、内部的なる、そして自己の意志に従へる、つまりるところは自己からして自己に與へたものでなくてはならないといふのであつた。

之れを要するにオイケンの主張は、精神治下に立つところの精神生活とし

ても、其れは何所までも自律であるべきもので、決して他律的であつてはならないといふにある、が謂ふところの其の自律なるものも、人間的自律、則ち何等の制裁もない我儘を根柢としたものであつてはならない、そして精神生活其のものによつて、殆ど神化せられたる人間の自律であることを要する故に此の自律があつて、始めて其所に自由が存するのであるのである。併しながら人間なるものが、明白に此の精神生活其のものに參與することなしに、型の如くに自然生活に満足して居る間は、如何にしても此の新たな徹底的境地に進み入ることは出来ない。

何故であるかといへば、夫れは全く小なる自我の手を脱することが出来ぬからで、何時までも小供の境涯から離れる譯には行かない、そして如何に苦しんでも、また如何に努力しても、逆も如法に眞の精神的自己といふものを形成することは出来ぬので、謂ふところの自然生活と精神生活との永遠の戦ひがある。

で人間が單なる人間としての境地から進出したところに、謂ふところの第二の階段が認められる。此の階段に於ての人間は、内部の反對の征服時期にある、言葉を換へて言へば、主觀と客觀と、物と我との結合が企圖せられ、そして物が眞に我がものとなると同時に、外部の仕事はこゝに内部の仕事と化し、一切の事業が核心を得ると共に、吾々の精神的個性が明かに形造さるゝのである。

之れは取りも直さず、自然が靈化せられ、勞働が精神化せられたもので、人間は確かに超越性を附與せられたものである、がオイクンとしては、斯るものを以て、尙ほ眞の人格の完全な發現ではないとするのである。

則ち彼れの言に従へば、人間の最も深い本體であるところのもの、則ち人格なるものは、唯だ人間が、外界の勞作から自己に立歸つて、此の第二の階段で得たところの精神的個性を超越して、更に宇宙的の自己にまで進んで行つたところに、始めて其の人格なるものが獲得せらるゝものであるとしたのであつた。

で其の第三の階段に於て、如上の宇宙的自己なるものが獲得さるゝといふが、夫れは如何にして得らるゝものであらうか。

オイクンは之れについて、其の運動は、勞作と正義と、文明と精神的個性との階段を突破して、創造と愛と、精神的人格と、純粹なる生活の獨立自存とに進むと説いて居る。

則ち純粹なる生活の獨立自存に進むといふのは、つまり新らしき生活が顯はるゝといふことで、創造と愛と、いへるところから、其の生活の中には、愛が人類の全體を密接に結び合せ、たゞに從來有り來りの物質を取り換へるばかりでなく、創造の力と改革の流勢とを以て、生存其のものゝ全部を一新するのである、之れが則ちオイクンのいふところの人格であるのだ。

茲にいふオイクンの人格なるものは、ますゝ新らたなる地位に進歩するものをいふのである。

斯くして人間が創造的活動の域に進み、純粹なる獨立自存を得るといふことは、人間としては絶大なる進歩向上で、則ち此の時に始て謂ふところの人格が獲得せられたものと言つて宜しい。

扱て斯うなつて來た人間は何うであるかといふに、則ち有らゆる現實なるものは吾々としての、自己の生活となるし、有らゆる活動はまた同じく吾々としての自己の活動と化して來る。

そして夫れは、吾々が無限のものであり、眞實のものであるところの、精神生活を己れの有とするによつて成就さるゝのであるから、則ち彼の絶對的のものが、吾々の精神的自己の一斷片となるのであるとする。

夫れからオイケンの人生的哲學としては、創造や活動やが、極めて重大なものとして取扱はれて居るのであるが、彼れの哲學の眞髓としては、全く其の生機的眞髓を此の二つのものゝ根柢に有するからである。

元來人間の中には、精神生活の絶對の者が働いて居る、ところで此の實在

のものは、如何にして夫れが把握され保持されるかといふに、到底理窟や何かでは分るものではない。

つまりは何うしても自分自身で之れを知るといふことでなくてはならない、然らば自分自身で之れを知るといふことは、如何なる方法によるべきものであるかといふに、夫れは素より直觀より外にはない、則ち茲に直觀なる働きが大なる必要となるのである。

そこで此の直觀については、オイケンは之れに二つの種類があると説く、則ち一つは感覺的直觀であつて、一つは精神的直觀とした。

ところで此の二つの直觀に於ては、同じく直觀ではあるが、根本的に其の性質を異にして居るものと解される。

則ち感覺的直觀の方は、本來の性質が自然的なもので、感覺的のものである。

そしてまた與へられたものであり、個々殊別的のものである。

次に精神的直観は、創造的のものであり、靈的のものであつて、また全一普遍的のものである、故に之れは實在が直接に吾々の精神内に現はれるのである。

扱て此の二つの直観につきて、何れを取捨すべきであらうかといふに、眞の實在を知らうとするのには、勿論感覺的直観よりは、精神的直観の方が優るものでなくてはならない、否な寧ろ夫れをして優勝者の地位にあらしめなければならぬ。

で此の仕事をして成果あらしめ、謂ふところの精神的直観を最勝最優のものにしよとするには、茲に一つの基本的考察を要するのである。

オイケンの言ふところでは、精神的直観なるものは、其の本來性として、宛かも天來的であるかの如くに現はれて來るものである、が此の顯現の時は、殆ど必然的に感覺的直観が夫れに對抗して立つのである。

併し前にも言つた通りに、此の二つの直観は、其の根本に於て異なるところ

ろのものであるから、對抗とは言つても、寧ろ兩々相敵として峙立されて居るから、其所に或る對比作用が行はれるのである。

言葉を換へて言ふならば、感覺的直観は、精神的直観の敵として立つて居るといふので、精神的直観は之れがために却つて明白に認められ、感覺的直観が働けば働くほど、精神的直観の方はますます明白となつて來る。

そしてまた感覺的直観に對しての對抗上から精神的直観を營爲すべき精神其のものが、勢力を集中するところからして、夫れが漸次に凝聚され、終に最も強固なるものとなつて、其の働きは一層優れたものになり、則ち茲によく在實其のものを把握し保持することとなるのである。

本來として人間の面目から言へば、先づ何よりも前きに自然の勢力が働く、有らゆる雜念、有らゆる衝動、有らゆる欲望、之れ等のものが間斷終始なく、生じては滅び、滅びては生じ、夫れが窮極なき繼續性を以て現はれて來るから、斯る場合に必ずやさまざまの紛亂が自らの靈性の上に惹起される、

で此の大なる紛亂は、如何にして處理さるゝかといふに、則ち精神が之れに對抗し始める、精神としても、何等標的がないところには活動が認められないが、斯うした自然的の因由による紛亂を來しては、其所に参加の因縁が生じて來るのである。

茲に於てか精神は努力する、そして能ふだけの奮闘を遂行して、謂ふところの眞なるもの、美なるもの、善なるものを顯現させるのであるが、此のやうなる顯現を名づけて、創造と稱するのである。

則ち之れ等の創造は、一に精神的活動によつて得られるのであるから、前に言つたやうに、創造といふことゝ、活動といふことが重要なものとされるのである。

精神は何故に斯くまでに戦はなければならぬものであらうか、之れに對する解答は、單に自然に對する抗拒といふことで足りる。

則ち若しも精神が何所までも如上の働きをしないものとしたら、自然界か

ら來るところの、有らゆる感覺的欲求などは、宛がら無人の地を行くが如く、に横行濶歩するに違ひない。

然うしたならば、謂ふところの精神生活界などは求めても得られないことになり、人間は永遠無窮に、低く單なる自然の奴隸として、何等人格の建設をすら爲し得ぬことになつて了はなければならぬ。

則ち精神は之れに應じて立ち、何所までも人間靈性の味方として、自然から來る一切のものを制禦し、或は之れを否定して、よく如法に眞實の人格と自由とを現前せしめ、其所に徹底的な人生の意義と價值とを知解せしむるものである。

けれども茲にまた注意しなければならぬのは、精神生活であるからと言つても、何も全然残るところなく、自然生活を否定して了つて、夫れを少しも取り入れぬといふのではない、之れを防ぎ之れを否むといふことは、つまり精神生活に矛盾したところのものである。

故に精神生活なるものは、當然自然生活をも包容したものと云へる。夫れからオイケンの真理に對する見解は何うであるかといふに、彼れの見るところでは、此の世界には、何等既成の本體則ち絶對といふものもなければ、随つて既成の真理などいふものもない。たゞ精神界の自作であり創造であつて、謂ふところの絶對なるものは、間斷なく奮闘するところの創造中に存するのである。

故に人間は活動によつてのみ真理が得られるのみで、決して思考などによつて得らるべきものではないと言つて居るのである。

夫れからオイケンの哲學は、甚しく宗教的色彩を帯びて居るのであるが、之れがやがて彼れの新哲學としての特色とも稱すべきものでなくてはならぬ。殊に其の精神生活に於ては、實に相即不離のものであつて、宗教を捨てるといふことは、やがて一切の精神生活を廢することに歸着さるのである。でオイケンは、普遍的であるところの精神生活といふものをば、神の生活と

同じものと觀たのである。

そして此の精神生活に參與するといふことは、取りも直さず神其のものゝ生活に參同して、神と人とが其所に渾然融合するところのものであると言ふのであつた。

此の故に、自然生活から脱して、精神生活に參同するといふことは、要するに、此の肉の制縛から脱れ去つて、神其のものと抱き合ふものであるとする。

そして彼れは宗教其のものに對しての信念を、一般的淺薄のところにも求むるものではなく、素より以前のまゝの宗教の根據の全然薄弱であることを看破して、終に开が確乎不動の根本的根據をば、人間の本性の中に据ゑ付けアウグスチンの言つた言葉なる「爾(神)は我等(人間)を爾に向つて進むやうに造り給ふ。されば我等の心は、爾の中に安らふまでは、安定を得ざるなり」を引いて、其の宗教的根本義をば、何所までも精神の上に相即せしめようと

するものであつたが、之れによつて何人と雖ども、謂ふところの宗教なるものゝ存在の理由が見出されるではないか。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並ぶ）

第二十章 ベルグソンの哲學

詩人的哲學者……直観の哲學……創造的進化……流動持續の世界……純粹持續

ベルグソン、正しくはアンリ・ルイ・ベルグソンは、一千八百五十九年を以て、佛蘭西巴里に生れたのであつた。

彼れの血統は猶太人であつて、其の一家は久しく英國愛蘭に住み、後に佛國に移住したものであると言はれるが、彼れが其の血統を猶太種族に有つといふことは、彼れの性格や彼れの哲學を研究する上に、極めて重大なる關係を有するものでなくてはならない。

記傳家の傳ふるところによると、ベルグソンは浪漫的な性格を具有して居るとの事だ、而して一面には熱烈な情緒を有して居るし、また一面には聰睿的理知を有して居ると言はれる。

併しながら彼れの情緒は、何時も其の理知の上に有り餘つた色を見せて、

往々人をして、詩人的科學者であり、また詩人的哲學者であると評せしむるほどである。

开は兎に角として、ベルグソンの哲學としての中心となるものは何であるかといふに、夫れは全く、實在の本體としての生命といふことである。

ベルグソンは此の生命を以て开が研究の中心的主題としたが、其の本質を以て、一に創造的進化に存するとなし、之れを表示するに、時間——純粹持續なる名目を以てしたのである。

而して之れと同時に、從來の空間や量などを本位にするといふ見地から離れて、有らゆる一切のものをば、動的と質的とに觀察しようとし、謂ふところの直觀を以て其の觀察の方法とした、之れが則ち彼れの哲學を稱して、直觀の哲學と言ふ所以のものである。

ベルグソンの哲學は、最も活々とした、極めて動的なもので、又大なる力に富んで居るものであるが、其の採用した直觀的方法是、純粹持續——創造的

進化なるものを其の内容的精髓とし、寸時も斷ゆることなく生々と活動するところの、生命なる一大事實を豫想するものなのである。

で彼れの哲學が、直ちに直觀なる文字が冠せらるゝと同様に、其の直觀なるものは、また彼れの哲學に對して、極めて重要な位置にあり、同時に大切な意義と資格を有するものでなくてはならない。

元來生命其のものとしては、最も變質的なものであり、また動的でもあり、自由でもあり、而してまた個的なものでもあるから、开をビタリと捉へ得ようとするところの直觀なるものも、最も動的な端的なもので、如何なる場合にも、直ちに其の生命の眞髓に飛び込み、轟進的に其の真相を望み得る底のものでなくてはならぬのである。

だから其の直觀なるものは、普通の知力やまたは一般の理知などに比しては、更に一層根本的のものであるから、此の作用によつて生せられた認識は、之れまで有り來りのやうな哲學上又は科學上の認識のやうな、相對的の價值

を有するのみのものではなく、實に絶對的の價値を有するものである。
 そこでベルグソンは、謂ふところの實在を如何に觀たかといふに、夫れは實に生々した、躍動的な、極めて微妙なものとして觀せられたのであつた、そして其のものは、寸分の間も斷ゆることなしに、生々躍動して、窮りなき境、限りなき地、果てしなき時にまで進化して行くところの世界、則ち謂ふところの流動持續の世界といふのが、ベルグソンの考想し思念するところの實在其のものであつた。

則ちベルグソンに於ては、獨逸流の觀念流にも、また單なる科學的知識の何れにも逆行して、如上の有機的の實在を見る方法を發見したものであるか、之れは確かに人間としての思想史の一轉期を豫示するものとしてよろしい。其の方法論の上について、分析や概念を排し去つて、直觀でなくては事物の真相にまで到達することは出來ないとし、其の本體論の上からは、前に言つた通り、實在をば固定された動かないものとは見ないで、夫れは不斷に流動

して居るものであり、持續して居るものであると論ずるところに、大なる徹底的頭腦が窺はるゝのである。

でベルグソンの言ふ直觀なるものは、果して何んなものであるかといふに、夫れは未だ何等の思惟的分別や細工を施さないところの、直接の意識状態をいふのであるが、彼れは其れを其のまゝにして取扱ふのである。

之れを普通にしては、吾々は其の直觀なるものをば、思惟によつて、或は固定したり、或は分別したり、或はまた限定したりしたがるものであるが、夫れでは必ずや其の見るところのものゝ真相を失するものである。

ところで今言つた直接の意識状態とは何んなものであるか、之れは當然起り來るところの問題でなくてはならない、則ちベルグソンは、空間なるもの意識とを對照して、そして夫れを説明して居るのである。

で空間なるものは、擴がりであり數量的であつて、且つ等質的のものであるに對し、意識其のものは、内質的であり、滲透的のものであつて、同時に

また異質的のものである。

ところで此のものゝ顯現せらるゝことは、單に異質性其のものゝ單位の結合ではなくて、謂ふところの相の交錯である。

そして彼れは之れを説明するために、純粹持續といふ語を使用して居るのである。

扱て然らば、其の純粹持續といふものは何であるか、ベルグソンの言ふところに據ると、純粹持續といふのは、我々の自我が、夫れ自身を生かさしむるがために、吾々の意識の諸々の状態が取るところの形ちである、または自我が、現在の状態をば、前の状態から切離すことを拒む場合に取る形ちであると言ひ、更にまた、持續といふことは、各自に溶和し滲透する内質的變化の連續、則ちハツキリとした外形もなければ外觀もなくて、それでまた自身の意のまゝに表示しようといふでもなく、また自ら敷を吹き出さうとする傾きもない、謂はゞ内質的變化の連續であると言つて居るのである。

則ち彼れのいふところの持續なるものゝ形と相は、之れによつて窺ひ知ることが出来るが、扱て其の性質は果して何んなものであらう。

之れについてベルグソンは下の如くに言つて居る、持續といふことは、吾吾存在の基礎である、故に吾々の感得する如くに、吾々の生活する世界の、眞の實質である。

でまた更に、眞の持續なるものは、事物の上に喰ひ込んで、其の齒痕を彼れ等の上に残すところの持續であるとし、又、吾々は眞の時を思索するものではない、たゞ夫れを生きているのである、なせであるならば、生命なるものは、理智其のものを超越するからであると言つて居るのである。

夫れからまた彼れは、吾々の意識の根柢は、記憶である、則ち現在にまで過去を延長することである。

今之れを一言で言ひあらはすならば、活動しまた消ゆる事の出来ない持續であると説いて居る。

之れは記憶といふことが、やがて持続であることを示すものであるが、吾の意識は、斯うした記憶の作用があるからして、其の生活なるものは異質的となるし、其の變化は初めて眞の持続をなすものであるのだ。

之れは畢竟するに、心意状態の繼續するには、必的に且つ常的に、現在の感情に記憶が附け加へられるものであるから、則ち持続は斯くの如きものとされるのである。

で此の持続なるものは、時其のものを言ふのである。ところで此の物は、或る見方によると開展的多数性を有つて居るやうであるが、また或る見方によれば、統一性を有つて居るやうなところもある。

併しながら、其の何れの一方を以て之れを表すにしても、他の一方を攝することが出来ぬのであるから、統一性であるとも、多数性であるとも言はれぬのである。

そして寧ろ一たび生じては一たび滅し、生々滅々相踵ぐのであるから、常

に一即多の有様を以て、斷ゆる時なく新らたなる流轉を續ける、そして夫れと共に營々倖むことなく、新又新と新しい創造をなしつゝ進み行くところのものが、則ち吾々の意識であり、また純粹持続の生命であるとする。

扱て此の純粹持続の生命、之れこそ實に純の純なるもので、最も至重のものでなくてはならない、則ち此の純なる生命が、如何なる物にも支配されないで、活動されつゝある時は、其所に全く恍惚状態が現前される、譬へて言ふならば微妙なる音楽を聴く時のやうなもので、音かあらず、我れかあらず音と我とは全く一體となつて、殆ど取り放つことが出来ぬといふ状態を現するのであるが、此の不可分離的状态にあるのを、取りも直さず直観といふのである。

右に言つた音楽を聴くやうな場合に、先づ誰れしも普通として、其の音楽が面白いとか、又は面白くないとか、或は演奏が巧妙であるとか、又は拙劣であるとかいふやうな判断を下したがるものであるが、然らなつては、もう

純なる直観といふことは出来ない、つまり夫れは主観と客観との對立といふことになつて了ふから、全く一つの概念といふものになつて、音樂其のものではなくなつて了ふのである。

が之れを實際に見るに、吾々は何うも此の純粹持續の生命をば空間化して、一つの概念として了ふのである。

之れといふのは、つまりは生活とか實用とか功利とかいふことからして、知らず識らず然うしたことになるのであらう、素より概念といふことは、吾の生活には、必要缺くべからざるものではあるが、併し事物を究めようとするに際しては、概念なるものゝ生起は、同時にまた物の真相を奪ひ去るものでなくてはならぬのである。

夫れでは一步を進めて、事物の真相は如何なるものであるかといふに、夫れは先づ動くといふこととされる、謂ふところの既成などといふものは、決して存在されてはゐないのである、現に存在されて居るものを求めたならば、

夫れは將さに成らんとするものに外ならないのである。

則ち傾動といふ言葉が、常に新たに生起變化するところの方向變化を示すの語であるとしたならば、有らゆる一切の實在は、みな傾動であると言はなければならぬ。

ところで誰れもが之れまでに取つて來た知的作用としての自然的傾向は、全く固まつた知覺の上に、固まつた概念を以て進み行くものであるから、動きつゝあり變じつゝあるところの實在を捕へようとするのは、最も至難の事ではなくてはならない、之れを卑近の例に求めたならば、水を掬はうとするに網を用ふるやうなもので、成程網の目的に合した或る實用的のものは掬ひ得らるゝかも知れぬが、其の流れ其のまゝの實在を掬ひ上げようとすることは素より不可能のことではなくてはならない。

則ちベルグソン哲學の教ふる直観なるものは、たとひ既成の熱心であるにしても、既に成し上げられた心にしても、また概念であるにしても、夫れ等

では到底實在の真相には觸れることが出来ない、故に全然之れ等の觀念を去つて、關する何物もなしといふ意識、換言すれば純粹持續の生命を以て之れに對することによつて、始めて其の異なる實相に接することが出来るといふのである。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

第二十一章 ゴーリキイの哲理

どん底から来た……敢てなる運命……個人主義……放浪の贖美者……民衆の中へ……革命的気分……強く生きよ

ゴーリキイ、正しくはマキシム・ゴーリキイは、千八百六十八年を以て、露西亞ゾオルガ河畔のニジニイ・ノブゴロツドに生れた。

が此のマキシム・ゴーリキイといふ名も、其の實は決して正しい名ではない、偽りのない彼れの本名は、アレキシス・ブエシコフといふのであるが、今日では誰れも彼れを呼ぶに、此の本名を以てするものがなく、マキシム・ゴーリキイが眞實の通名になつて居る。

で此の假りの名の意味するところは、最も大なる痛苦といふのであるから、彼れの如き性格を有するものには、寧ろ至極適當した名前であるかも知れない。

彼れが文界濃氣の中に、輝々たる光りを點して現れたのは、實に未知の彗星が突然として其の姿を現したやうなものであつた。

そして彼れ自身が「俺はどん底から來た、泥濘と陰濕の氣とより外に何物もない人生のどん底から來た……俺は信すべき人間の聲だ、今なほ其所に住んで居る者共の苦しい叫び聲だ、彼等は彼等の苦しみの證人として、俺を世の中へ浮び上らせたのだ」と叫んだ時に、情氣に充ち偽善に満ちて居た當時の文界や有らゆる階級の人達が、如何に震駭の眼を見張つたことであらう。どん底からの人間、何といふ悲痛の叫びであらう、また何といふ現實の叫びであらう、そして俺は信すべき人間の聲だと叫ぶところに、肉を切り骨を刻む苦しい唸きが聞えるではないか、此の恐ろしき人間、恐ろしき叫び、そしてまた恐ろしき宣言が、何れだけ彼れの作品によつて裏書されたのであらう。

そして夫れと同時に、また彼れとしての作品の眞なる價值が、全く茲に存

するものであることが知らるゝのである。

併しながら、之れを今日から見ると、其の當時としての露西亞は、彼れをして生せしむることさへ、餘りに當然な現況にあつた、則ち當時の露西亞としては、ゴロリキイならざるもみな开が困厄を筆にすべく緊張されて居るのであつた。

壓迫と貧窮と惡運と零落、そして夫れに由つての闇黒と悲歎は、遂に限りなき絶望の淵に夫れ等生民を顛せしめんとして居たのである、さらでだに理智的であり鬱憂的である露西亞國民の文學は、實に貧民階級の生活を云爲すべく汲々されて居たのである。

が彼れゴロリキイとしては、決して單に此の自然的傾向や潮流によつてのみ生れて來たものではなかつた、言ひ換へれば夫れ等の使命のみのものとしては、何もマキシム・ゴロリキイの出現を要するまでもないことであつた、併し其の謂ふところのどん底に苦しんで居るところの人間、夫れ等には如何な

る現在があらう、そしてまた如何なる運命があらう、そしてまた如何なる生命があらう、そして更にまた何んな力があるであらう、彼れ等の自我は如何に、彼等の信念は如何に、之れ等のものを如法に取り出して、夫れに眞の藝術的表現を與へるものとして、實にマキシム・ゴークキイの出現が促されたのであつた。

一口に貧民と言つて了へば夫れまでのものである、虐げられたる弱き者、打ち見たところでは實際人間と名の附く動物としか思はれない、強烈な酒も飲むし、自棄的に博奕も打つ、そしてまた世を呪ひ自らを呪ひ、唸き且つ叫ぶのである。

併しながら斯る虐げと貧苦と壓迫のどん底に居る謂ふところの貧民は、實際然うした檻の中に囚へられて、結局は惨なく拙きものとして自滅して了ふものであらうか、併しゴークキイの見たものは中々其様な生氣のないものはなかつた。

ゴークキイの理想として見出して來た人物は、みなお定まりの無頼漢であつた、或者は殺人もする、そして或者は強盗もし兼ねない、謂ふところの著にも棒にも懸らぬほどの人間であるが、而も不思議なことには、夫れ等の全體が、決して絶望したり悲哀したりすることがない、ナニニ何時か救済の時が來る、夫れまでは何んな苦しいことでも辛抱しろ、歎くなんかは女々しいことで、啣つなんかは愚の骨頂だ、何でも構はん叩き潰されて了ふまでも生きて居て戦へつといふ氣分が、其の謂ふところのどん底の人間の胸にも張り切つて居るのである。

歸らめて引込むといふよりかも、彼れ等は寧ろ積鼻禪を締めて突進した、生きなければならぬ、生きるならば本當に生きろ、其の中にはキツト革新が來て、俺達のやうなもののみ無くなるといふ世の中になるのだ。

言ひながら彼れ等は、殆ど言ひ合はしたやうに、齒を嚙んで戦つた、之れが實に彼れ等としての本當の生活であつた。

虐げられての希望、どん底にあつての力、之れが實に彼れ等としての最も強き生活であつた、彼等は苦しんで居る、併し其の精神は自由であつた、そして其の苦しみなながらも戦ふのは、實に其の自由な精神の要求によつてのものである。

ゴリキイの父は、マキシム・ブエシコフと呼ばれるものであつたが、之れとても既に異常な經歷を有つたものであつた。

則ち彼れの父（則ちゴリキイのためには祖父）は一たび軍職をニコラス一世の朝に奉じて居たのであつたが、其の資性が極めて残忍であつたところから、遂に其職を免せられたといふほどであつたが、退職の後家庭にあつても、依然としてあらゆる冷酷と残忍性を發揮するので、道がのマキシム・ブエシコフも居たゝまれなくなり、まだ二十歳前といふに开が家を出奔し、遂に放浪者の群に入つて歐羅巴から亞細亞を流轉浮浪し、有らゆる艱難辛楚を凌いで、亞細亞露西亞のドボルスクから、歐羅巴露西亞のヴォルガまで辿り來

て、辛くも其所に最後の棲家を見出し、始めて放浪者から定住者に復つて、茲に家具屋を營むことゝなつたのであつた。

此の事實は必ずしも無用な一家の歴史ではなく、ゴリキイの總てを語る上には、最も必要とせらるべきものである。

ゴリキイが放浪性を有すること、而してまた絶大なる忍耐性を有するといふことは、之れによつて开が親譲りのものであるといふことが了解されるのである。

造化の手による數奇なる運命は、早くもゴリキイの上に其の第一箭を投じたのである、則ち彼れは漸く三歳であつた時に、極めて劇烈なコレラ病に罹つた、が彼れは辛うじて癒ゆることが出来、其の一命を取り止めたのであつたが、彼れの父は其の病毒に感染して、終に不歸の客となつて了つた、扱て斯うなつては、マキシム・ブエシコフの妻であり、ゴリキイの母であるワルワラは、殆ど自活することが出来なくなつた。

そこで彼の女は、幼少なるゴリッキイを其の祖父の手に委ね、其の身は他に再嫁すべく餘儀なくされたのであつたが、之れとても間もなく肺を病んで死んで了つたが、茲に至つてゴリッキイの冷やかなる暗い運命は、遂に其の第一幕を開かれたのであつた。

父の死後母方の祖父に托せられたゴリッキイは、兎も角も九歳まで其の手に養育されて居たのであつたが、其所にもまた運命の嵐は吹いて來たのであつた。

で此の祖父といふのも、何れは同じ腕一本から仕上げた人物であつた、仕上げたといつても、最初は素より精々其の日を送るだけのこと、ヴォルガ河の曳船曳にしか過ぎぬのであつて、其の生活と言ふものも、全く野獸の夫れに似て、便りけのない、そして肉體一つの外には何等の趣味もない、曳船の生活から、兎も角もして浮び上つて、遂に相當の財産を作り成したといふ體力一點張りの小さな成功者にしか過ぎぬのであつた。

ところが此の祖父なるものが、曳船業者の仲間の組合長の選挙に失敗してから、ガラリと其の様子が變り、スツカリと自暴自棄になつて了つたので、之れまでの多少の成功も水泡に歸し、瞬く間に其の日さへも送ることが出来ぬ乞食の境涯に陥つて了つたから、茲にゴリッキイは、全く便りのない正銘の孤兒となつて了つた。

が只一つ彼れのために特筆しなければならぬことは、父と母と祖父との何れからも温かな優しい或る人間味といふものを得なかつた彼れも、其の一人の祖母のためには、甘い柔い何物かを附與されたのであつた。

彼の女は、此のいたいけないゴリッキイを抱擁しつゝ、温順親切な女性的慈愛を以て彼れを温めた、冷やゝかな氷のやうな中に育つて居るゴリッキイは、斯うして未だ曾て知り得なかつたところの、不思議な國—お伽の世界—に導かれ、そして其の浪漫的な氣質が醸し成されたのであつた。

則ちゴリッキイとしては、母から享有した考へ深い心の地質に、更に祖母

から打ち込まれた空想的な明るい色が加はつて、遂に其の異常を好み、平凡を忌むやうな氣風が造り出されたのである。

で之れを詮じて見ると、ゴリキイの心意を成すところのものは、取りも直さず最も強き個人主義其のものであつて、同時に放浪の讚美者であつたのだ、一切の羈絆を脱して何物にも支へらるゝことなく、飽くまでも自分の本能のまに／＼生活するといふ浮浪者、そこに眞の人生があると彼れは考へたのである、たとひ何であらうとも、兎に角夫れは強い行ひであり、然るが故に善でもあれば道徳でもあると思惟するのである。

だから彼れの作中に現はれて居る人物の多くは、腕力と肉慾とを生活の全部とし、神もなく道徳もなく、そして社會すらもない、たゞ赤裸々に獸性を發揮して、勇敢に犖猛に振舞ふもので、やがて其所に個人主義の極度のものが示されて居るのである。

ところで一たび祖父の手から離れなくてはならない運命に到達した彼れは、

之れ等の第二の天性を鑄附けらるべき凄酸なる放浪生活に向つて其の第一歩を運び出したのであつた。

扱てゴリキイは、自ら生活すべく靴屋の丁稚となつたが、夫れは彼れが九歳の時であつた、けれども僅か一年ばかりで其所をも立ち去り、聖像屋の丁稚となつたが、其所も間もなく飛び出し、彫刻家の弟子から園丁と轉々して、遂にヴォルガへ往復する汽船の厨夫見習となつた。

ところが其の船に、スムーリといふ料理番が居たが、之れは軍人上りの文學好きのものであつたから、之れが盛にゴリキイに文學熱を吹き込み、其の所有して居る種々雑多な書物を閱讀することを許したのであつた。

其の書物の中には、種々の種類のものがあつた、地理歴史などの類から、聖僧たちの傳記類、其他之れといふ纏まりのない雜書類の外に、小説としてはデユーマの作もあれば、ゴリキイなどの作品もあつたといふ。

そこでゴリキイは其のスムーリと共に、忙がしい閑を竊んでは、其れ等

の書物を読み且つ論じ、新らしき知識と興味とに對して、其の熱血をば更に湧き立たしたのであつた。

一たび知識慾を唆り立てられたゴリッキイは、如何にかして大學に入らうと、前後の考へもなく船を脱走してカザンの地に走つた。

が其地へ來て見ると彼れの豫想はガラリと外れた、素より一文の學資もなしに、彼れを收容する大學などが有る筈はない。

「大學といふ所は、金の無いものには入ることの出來ぬ所である」と悟つた彼れは、依然としてまた今日其の日から生活の爲に働かなければならなかつた。

どん底から飛び上つた彼れは、瞬間にしてまた元のどん底に歸らなければならなかつた。

金が無いために教育さへ受けることが出來ないといふなら、文明に鑑三文の價值もない、斯う思つて文明を呪ひ、富めるものを呪ひ、社會を呪つた揚

句、パン屋の職人といふ元の奎阿彌に復した。

屋根裏の寐起きで十八時間の勞働、夫れで月給が五ルーブルといふ悲惨な生活、殊に血も涙もない雇主の酷使には、道がゴリッキイも藻掻きに藻掻いて、前後二年の間殆ど地獄のやうな最大苦痛の歲月を送つたが、此の時が彼れの生涯を通じての、一番苦しかつた時とされるのである。(此の時の生活の悲惨な光景を寫したのが、二十六人と一人である)

斯うした地獄生活の中にも、彼れは其の思想や藝術に就てのエネルギーを培養したのであつたが、何しろ空氣の悪いのと、食物の悪いのとで、彼れは甚しく其の健康を害し、今は寸時も其所に留ることが出來なくなつた。

そこで彼れは思切つてパン屋を飛び出し、再び以前の放浪に立ち歸つた、そして、荷揚人足から木挽、黒海の沿岸から南部露西亞と、轉々流浪する中に、彼れの根氣は終に盡き果てゝ了つた。

そこで千八百九十八年といふに、彼れは絶望の餘り、ピストル往生を企て

たのであつた、が幸か不幸か、彼れは夫れの素懐を達することが出来なかつた。

彈丸は明らかに肺にまで達したが、夫れが急所を外れたので、彼れは更に生きつゝある方に運命づけられたのであつた。

生きなければならぬ身、兎ても角ても死なれぬ身となつて、彼れの傷は空しく癒えたのである。

サア生きる、此の上は立派に生きる、何の養生きずに居るものか、彼れは其の健康が恢復された時に、斯う叫んで躍り上つたのであつた。

立派に生きよう、強く生きよう、斯う決心した彼れは、全く更新されたかの如き人間となつて再び社會へ乗り出した。

そしてまたも奮闘場裏の闘士となつて、林檎賣りとなつた、夫れからツアラデンで鐵道の信號夫をやり、間もなく徴兵検査のために郷里へ歸つたが、自殺を仕損じた頸部の創痕で兵役は不合格となり、再び生活のために、労働

者にクワスのコップ賣りをやつた。

其の中に彼れは、ラーニンといふ辯護士の知遇を得て、其家の玄關番となつた、之れは彼れの身の上を取つては、實に異常な大變化であつた、殊に主人のラーニンは、上流の紳士で、學問もあり極めて寛大なもので、他に對する同情といふものも篤かつたので、彼れとしてはスムリーに次ぐ第二の師を得たのであつた。

ゴーリキイは其家で多くの學生たる青年に交り、新らしい自由や平等や正義や主義やを研鑽論議することが出来たので、彼れの頭腦は忽ち熾烈の影響を受け、古きものよりのあらゆる覺醒と、權威ある激しい自我の要求といふことと、猛烈に彼れの胸中に叫び出されるに至つたのであつた。

此の間の生活は、彼れに取つては比較的安易なもので、其の得るところのものも尠なからぬのであつたが、夫れとても今やゴーリキイの動搖する心を察し止めることは出来ぬのであつた。